
教室という名の地獄

熊田 ミリヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

教室という名の地獄

【Nコード】

N1980B

【作者名】

熊田 ミリヤ

【あらすじ】

13年前。いじめを受けていた綾子。社会人となり人としての幸せな日々を送るハズだったが、ある日、綾子の会社に元クラスメイトで綾子をいじめていたメンバーの一人・岡本敬二が中途入社してくる。再び綾子に悪夢のような毎日が訪れるのだろうか…？

第1話：悪夢との再会

「ウザい」

「死ね」

「気持ち悪い」

それが私の事らしい。

小学校時代…5年生の頃から私がクラスメイトに何かしたという訳でもないのに…

13年経った今も世間に相次ぐ、悩み。苦痛。
自殺。

綾子は朝のニュースを重い気持ちで見ている。軽い吐き気を催す。

横では父が

「またか…本当、最近の子供って怖いな…」
と呟きながら目玉焼きをご飯にかけている

「そつだね…」

綾子も力なく呟いた

怖いのは…今に始まった事じゃない。

私が両親に何も言わなかった。

だから両親は私が過去に同じような経験をしていたなんて知る訳がない。

なぜ言わなかったかといえば…心配をかけたくなかったし…白い目で見られるのが嫌だったから…。

「いつてきまーす」

結局

綾子はそれ以上に箸をつけないまま家を出た

通勤中の電車でいつものように眠り、会社まで辿り着く。

朝のニュースに関して何も感じてない訳ではない。
とにかく今の毎日が忙しかった。

今現在24歳

来春に結婚も決まっている。仕事もようやく慣れて来て早3年。
安定しているのだ。
幸せなのだ。

なのに。

どうしようもなく不安になる時がある。

突然周囲の人間が怖くなる。

派手な人を見掛けると逃げたくなる。

基本的に男性が苦手。

何かしら後ろ向き。

綾子の過去の悪夢の日々は将来にこんな爪痕を残していた。

決して消えやしないだろう。

そんな気持ちをぼんやり抱きながら入社し、タイムカードを押す。
ぼんやり感を残しながら昼食をとりに従食へ向かう。

あれ？

営業課に男性の新人社員が入ったみたいだ。
営業課のマネージャーが熱心に新入りに話している。

綾子が横を通り過ぎようとした時。

信じられない横顔が視界に入る。

綾子はなるべく遠くの席に座り、手を握り締め俯いた。

「う…そ…!？」

見覚えのある顔。

派手ではないが、背の高く色白で目付きの少し悪い顔たち。

次々に蘇る悪夢達。

綾子はしばらく動けなかった。

彼は5年生の頃のクラスメイトで綾子をいじめていた男子のリーダーグループの1人だった。

忘れもしない

岡本敬二

帰りに別人である事を祈る気持ちでタイムカードを確かめて見ると
…やはり彼の名があった。

また…あの時のような悪夢のような毎日が…！？
綾子の手は震えていた。

第2話：リアルな夢

目線を前に向けると教室のドアがあった。

この先は敵しかいない。

何が起きるかなんて容易に想像が付く。

けれど私の手はドアを開けてしまっただった…

意地悪な周りの視線が私に集まる。

当然のように

「おはよう」

の挨拶なんか、ない。

机には読み取れないぐらい書きなぐられた文字がたくさんあった。

「学校くるな！」

「気持ち悪い！」

「ブスは死ね！」

「すぐ自殺して下さい！」

「迷惑」

冷汗をかいて綾子は飛び起きた。

飛び起きた拍子に涙が流れた。

心臓が物凄い音を立てて鳴っている。

横にある目覚まし時計を見ると時刻は午前4時過ぎだった。

良かった。

今は24歳の私だ…

周りを見渡しても意地悪な人はいない。

一人、自分の部屋にいた。

また眠ると悪夢を見そうな気がして目を閉じる事が出来ない。

急に泣いたからか、頭が痛い。

あの時の恐怖は、今だに私を苦しめている。

結婚して、旦那の前でこんな姿を見せたくない…

結局眠れずに、綾子は近所を散歩する事にした。

夏の終わりの早朝。

日中はまだまだ蒸暑いが朝はすごく爽やかな空気。清々しい。

団地を少し離れ、コンビニで缶コーヒーを買って公園のベンチに座る。

ジョキングをしている夫婦、散歩中の犬とおじいさん、これから出勤のサラリーマン…そんな人達から見れば自分は浮いて見えるだろうか…

でもまだここで考えごとをしていたい。

岡本敬二。

昨日突然再会した同級生。

そして、綾子を未だに苦しめている原因の一人。

きつと…明日から…また…

昨日のやたらリアルな夢が…いや、過去に実際にあつた事がフラッシュバックする。

眉間にシワを寄せていると、とある考えに辿り着く。

よくよく考えると、不利なのは岡本の方かもしれない。

綾子に関しての変な噂を広めたとしても、入社したばかりの彼の言う事。まだ岡本は人間関係も上下関係も読めているとは思えない。果たして、入ったばかりの、周りの信用もまだ無い新人が言う私の悪口を聞いて誰が真に受けるのだろうか？

「…そうか…まだ私は何とか出来るかもしれない…」

少なくとも、今の会社で何年も勤めて来てるし、岡本よりも信用はあるはず。

それに…社内恋愛の末、結婚の決まっている彼氏もいる。周りも認めてくれていくぐらいだ。

けれど…彼に過去を話したら…どんな風に感じるんだろ…？

綾子は再び俯いた。

けれど、表情は険しかった。

絶対…壊させはしない！！

綾子は正面を睨むようにキツと見つめた。

だったらもう思い通りにさせない！

戦ってやる…！！

私。今物凄く苛々してる。でもそれに驚いてもいる。

絶対負けない…！！

見てろ！！

明日から…会社が怖いけど…これは試練なんだ。あいつらに勝つんだ…！不幸になったら負けだ…どうしたら勝てる？

仕事出来るようになって…彼とも上手く行って…

「アイツよりも幸せになる！！」

こうして綾子は、これから先、岡本に立ち向かう覚悟を決めた。

少し気が晴れた感じもした。

いつの間にか頭痛も引いていた。

第3話：宣戦布告

翌朝。

不安になりながらも会社に出社する。

岡本の事で頭がいっぱいだったのか、今日は通勤電車で寝てないぐらいだ。

とにかく。

何か言われたり、されたりしたら

「やめて下さい！社会人にもなってこんな事して恥ずかしくないんですか!？」

と怒鳴りつけてやるつもりでいた。

しかし、仕返しをされる可能性もある。

岡本が、他にクラスメイトがいないにしろ、若い男性社員を味方に付け出したら…

きっと昔以上に酷い事になるかもしれない…

今の幸せ。全部壊されるかもしれない。

婚約解消

同僚からの嫌がらせ

業務妨害

一般的に見れば大袈裟に恐怖を抱いているのかもしれないが…人間不信に陥っている綾子には本気の心配事だった。

子供の頃は単純な暴力と汚い言葉を浴びせる事しか知らないだろう。だが、大人になればどうだろう。

お金の事、カード情報の事、仕事の事…子供の時よりいろんな物事を理解している。

それだけ知識が増えている。人を苦しめる事なんか容易に思い付くだろう。それに暴力なんて受けたら生命の危険もある。そうしたら綾子が想像しているよりずっと最悪な事が起きるかもしれない。

けれど、綾子にとっては今在る幸せを何としても守りたかった。

自分を守る為には今ここで岡本に立ち向かわなければならぬ。

タイムカードを押し、自分のデスクに座る。

いつものようにパソコンと睨み合いをし、昼食をとる。

不安だったが何も起こってない。

いつも通りだった。

ちよつと拍子抜けすらしてしまう。

「綾子、お疲れ様。」

背後から聞き慣れた声がする。
婚約相手で彼氏の英雄だった。

「なんか…あつた？」

英雄は綾子の顔を覗き込み、心配そうな顔をする。

「え？…ううん。何もないよ。」

綾子は一瞬見抜かれたと思い、ドキツとするが、すぐに平静を装った。

「え？いや…なんかさ…いつもと雰囲気違ってさあ…」

英雄はポリポリ頭をかいた。

そしていつもの様に互いの仕事話、世間話、拳式の相談で休憩時間を過ごす。

そんな状態で2週間ぐらい過ぎた頃だった。

いつものように昼食をとる。

プラプラ英雄が綾子に寄ってくる。

だが、この日の英雄は、いつもと様子が違った。

綾子は少し嫌な予感を覚える。

「なあ…ちょっときーていい？」

「え？…どうしたの？」

綾子は先程から自分を襲う寒気と胃痛で顔色がどんどん青ざめる。

英雄は周りをキョロキョロ見渡し、少し小声で

「綾子さあ…営業の石渡マネージャーから聞いたんだけどさ…新しく入ってきた奴、いるじゃん？…同級生だって？」

綾子の心臓は凍り付いたように冷ややかな血を全身に送った…

宣戦布告。

第4話：地雷

嫌な予感が体中を駆け巡る。

青ざめている綾子に英雄は次の瞬間、また信じられない事を話し出した。

「…なんかさ…仲良かったら…悪いんだけどさ…昔から？アレ、あんなんなの？」

えっ!？

綾子は自分の想像していた事とはまた違う事を言われ、キョトンとする。

「えっ…？岡本君が…どうしたの？」

逆に、英雄に探りを入れてみる。

英雄はまた辺りをキョロキョロ見渡して、「すっげえ暗い奴って営業課じゃあ入社早々有名だったんだってさ。」

英雄は続けて

「ちょっと可哀想だよな…社交的じゃない奴が人と関わらなきゃいけない営業課に配属されちゃあさあ…まあ、社会人だし、性格とはいえ、な。割り切るしかないよな…」

暗い奴？

確か昔は…常にクラスの中心にいる男子グループの1人だった…

どうして？

そこにもう一つ。違和感を覚えた内容があった。どうして石渡マネージャーは私と彼が同級生と知っていたのだろうか…？

役職に就いているとは言え、彼はともかく、私の履歴書を総務課でない限り勝手に見る事は考えられないし、皆の前で会話してもいいし、気付く訳も無い。

彼が同級生だったという事を自ら話したのだろう。

何の為に？

疑問が次々に浮かび上がる。

結局、岡本の話はここで終わってしまい、後はいつもの雑談になった。

英雄にとって、どうでもいい内容だったようだ。

いじめられてた過去は知られてないと思う。

彼が入社してから、営業課の人達とも普通に接していたし、彼は私の過去なんか話してないだろう…

少しゆとりが出て来た。

でも、まだ岡本の存在は綾子にとって地雷のような物だった。

仕事に嫌気差して辞めてくれれば…

そんな事も内心願っていた。

だが、数日後にまた綾子を凍り付かせる事件が起こるのだ。

「綾ちゃん。総務課松本部長から電話っ」

松本部長に呼び出され、総務課の事務室へ行くと、松本部長がニコニコしながらこう言った。

「町田くん。君、いつも仕事もバリバリやってくれるしさ。ずっと経理事務ばかりやってたけど、営業事務で人手が足りなくて、君しか頼めないと思って任せたいんだ。」

綾子はまた大きな衝撃を受ける。

「営業課に…配属ですか…?」

そんな綾子に全く気付かず松本部長は

「そう。来月から営業課に移動という事になるね。上も、石渡も、君なら完璧にこなしてくれるだろうって期待してるんだ。今までの仕事よりちょっと大変だけど、石渡もフォローするし、やり甲斐はあると思うよ。頼んだよ!」

ポント!と綾子は肩を叩かれ、一瞬よろける。

来月から…同じ…部署に…!?

第5話：背後

数日後。

綾子は、ついにこの日が来た。と、憂鬱な気分で営業課のデスクに座る。

朝礼で松本部長は相変わらず気付かない様子で

「あー…今日から、経理事課の町田くんが営業事務で配属になったから、最初はわからない事も多いだろうから、皆で助けてあげて、な。」

違う事で助けて欲しい…

綾子は複雑な気分だった。

とはいえ、石渡マネージャーが熱心に仕事の説明をしてくれる。

よそ見も出来ないし、違う事を考えてももられない。

だが、どんなに頑張っても完全に集中する事が出来ない。

背中に冷汗をかく。

まるで…悪意を背中に刺されているような感覚だった。

背中が冷たい。

背後には黙々と書類を書く岡本がいる。

シワリ…シワリ…

暗闇の中。無抵抗な獲物を執拗に狙いを定めながら近付くような視線。

懐かしい。

吐き気を催す程、懐かしい感覚だ。

怖い…

昔のように…その書類から目を離し綾子の後ろ姿を睨み付けているのでは…？

「それでさあ……………」

石渡マネージャーが相変わらず一生懸命横で教えてくれているのが救いだ。

ところが…

「マネージャー！外出の時間っすよ〜！」

同僚が石渡を呼びに来る。

えっ！？…行かないでっ…！！

背後の恐怖の存在に狙いを定められている

「町田あ！ちよっくら行ってくっからよ〜昼までには戻ってくっからよ〜」

「…はい」

石渡は綾子のマウスの上に力なく置かれている手が、止まる事なく震えている事なんか気付く訳がない。

背広を着て、だらしなく結んでいたネクタイを絞め直す。

そして、不安と恐怖に震えている綾子を置いて行ってしまった。

周りはいつも通りの空気が流れる。

ただ…2つのデスク以外は。

ジワリ…ジワリ…

綾子は、また恐怖に執拗に追い詰められている感覚に陥った。

耐え切れず綾子はトイレに逃げるように駆け込んだ。

ここまで来れば大丈夫。

もう…嫌だ…。

デスクに戻りたくない…。

鏡を見つめる。

トイレ内をウロウロする。

再び鏡を見つめる。

口角は下がり、眉間にシワが寄っている。

今にも泣き出しそうな目元。

ああ…老けて見える。

溜め息をつく。

けれど、立ち直るのにあまり時間はかからなかった。

どうして…私、逃げなきゃいけないの？

昨日までの決意を思い出す。

「…そうか！逃げる必要ない！」

「私が逃げてどうするの！」

「このままじゃあ…負けちゃうー！」

岡本のせいで、やつれて老けて見える、鏡に映った自分に喝を入れるようにキツと見る。

行かなきゃ。

また同じ事繰り返し返す所だった！

トイレを出て、綾子は大股でずんずん歩く。

まるで

「恐怖」

を威嚇してるみたい。

でも、負けない！

そうしてドアをくぐった時。

「お前のミスで起きたクレームに石渡が謝罪行っただぞ！判ってるか！？」

松本部長の怒鳴り声が聞こえて来た。

一瞬ビクツとして綾子は怒鳴られてる岡本を見つめた。

同僚の女性社員が綾子にそつと小声で

「脅かしちゃったでしょ？」
続けて

「岡本さん、取引先怒らせちゃったんだって…それで石渡マネージャーが謝罪行ってるんだけど…すみませんの一言もなかったって誰かが部長に言っちゃったらしくて…」
ちよとすごい場面に出くわしてしまった。

なるべく部長の視界に入らないようにデスクに戻る。

すごい衝撃が走った。

だが正直、いい気味だった。

仕事の続きを片付けている時。

不意に視線を感じ、恐る恐る顔を上げる。

背後を向く事は出来ないが…

そこには神妙な面持ちの岡本の視線があった。

その時。

大きな足音で石渡が帰ってくる。

石渡は岡本のデスクに行き、何かを話している。
そうしている内に昼休みとなった。

第6話：対峙

一人、食堂で昼食をとる。

今日は話し相手の英雄は休み。

たまには一人静かにボンヤリ過すのもいい。

でも今日は食欲がない。

先程の怒鳴られていた岡本の姿が頭に焼き付いて離れない。

いい気味とは思ってた…だが嬉しい訳ではない。

同情する理由もない。

いろんな事がこんがらがってる。

確かに。

昔のクラスの中で仲間と騒いでいた岡本と、今の岡本は同一人物とは思えない程逆転している。

何かあったのだろうか…

私を苦しめてきたクラスメイト達は皆私よりも幸せになって、今だに私をどこかで見下している。

そんな気さえしていた…

なのに。

今日の岡本の姿を見て得体の知れない衝撃が走っている。

綾子は手を握り締めた。

その時。

「おっ？町田あ！」

石渡がノシノシ歩いて来る。

その背後に岡本もいた。

綾子は体を硬直させる。

「どっころしょいっとと。」

マイ灰皿とタバコをテーブルに置き、石渡は綾子の横にドツカリ座る。

いつもなら冗談の通じる石渡に

「イス壊れますよ〜」

とか絡めるのに…

今日は…いや、今は言葉が喉の奥底で止まってしまっ。

嫌な予感がする。

石渡は案の定岡本…今一番関わりたくない人間を自分の前に手招きする。

「岡本〜っ。まあ座れ」

（やめて！）

岡本は少し躊躇したが石渡の前に座る。

（言わないで！）

（お願い！やめて！！）

石渡は決して悪気はないのだが…綾子の祈り虚しく、一番突っ込まれたくない痛い言葉を口に出してしまうのだった…

「町田と岡本、同級生なんだってなあ〜！」

相変わらず表情の暗い岡本。だが視線は綾子に向けられていた。

獲物との対峙。

綾子は体中の血が冷めて行くのを感じた。

そして…後に自分でも驚くようなセリフを吐いていた。

「ええ。そうですよ。小、中学校一緒の所でした。」

…と、妙に落ち着き、少し笑みを浮かべ、堂々と答えた。

その瞬間。岡本の視線の様子が少し変わったように感じた。

石渡は

「おおっ！そうかあ！」

そして岡本に

「なーんだよ！オメ、照れんなよ〜！」

照れてる訳ないでしょ！

綾子が叫びたくなった。

むしろ…嫌がつてる？

綾子は更に笑みを浮かべた。

岡本にとっては勝ち誇った嫌味な笑顔に見えるだろうから。

余裕ある態度をとっている反面、頭の中は大混乱している。

悟らせるものか！

性格悪いとか、ひねくれてるとか…どうとでも思えば良い！！

石渡は面白くなってきたのか、また何かを言おうとした…その時！

トゥルルルル…トゥルルルル…

食堂の電話が鳴った。

綾子は立上がり受話器を取る。

「もしもし…営業課町田です…あ、ハイ！わかりました！すぐ戻ります！」

石渡は綾子に

「おう、どうした？」

「私宛に外線電話があったそうです。」

石渡はタバコの煙を豪快に吐き

「そっかいそっかい」

と何かを言い足りなさそうに言った。

言わなくて良いから！

綾子は心の中でそう叫んだ。

本当…良いタイミングだ…

岡本はちよつと複雑そうな表情をしながら綾子を見つめていた。

その後の仕事や帰り道、昏間に気力を全部使い切ってしまったようで、どんな仕事をしたか…帰り道どうやって帰ったかも記憶が曖昧だった。

帰宅し、少し落ち着きを取り戻した後、英雄との電話も終え、一日が終わる。

ベッドに潜り込んだ時、ふと、開けっ放しにしてたクローゼットの
中の段ボール箱に目が行った。

たしか…！

何かに操られるようにフラフラ段ボール箱を取り出しガムテープを剥がした。

中には…習慣でもあり、唯一正直に毎日を書き綴った昔の日記が何冊も入っていた。

綾子は小学校5年生の頃の日記を手を取った。

最初はどつでもいいような内容…まだいじめに会う前の内容だった
が…

1学期の終わりの方のページの見出しにこう書かれていた。
“教室という名の地獄”と…

第7話：子供の姿をした悪魔達

7月4日

夏子ちゃんと一緒にそうじ当番がやだ。私が一生けんめいにやっているのにトロイって言われる。ごめんねって言ったら、ぞうきを顔に当てられた。男子がそれを見て、私がぞうきん食ったってさわいだ。そんなもの食べてない！それからバイキンって言われた。くやしくて泣いてしまった。教室に居たくない！

7月5日

杉田くんに

「お前ん家金持ちだから俺にゲームを買え」
って言われた。

家は金持ちじゃない。なんでだろ？

そしたら顔をなぐられた。鼻血が出てきた。そしたら鼻血がきたない 気持ち悪いって言われた。顔は、はれちゃってジンジンする。先生がきたらコケたって言えって言われた。

ページが鉛のように重く感じる。

7月6日

今日は日曜日だから学校がない。うれしい。
でも、あっといいう間にねる時間になっちゃった。もう学校行きたくない

7月7日

今日からトイレそうじになった。また夏子ちゃんにいじめられた。今日はとじこめられて、男子に洗剤かけられた。

綾子は眉間にシワを寄せ目を見開く。

岡本くんが外から

「バイキンは消毒しなきゃ！」

と笑ってた。私きたなくないのに！

大人になった私からしても…惨い。

次々に記憶が蘇ってくる。

夏休み中の日記は割と安定した様子だった。

学校が嫌だとか、教室に入りたくないの単語も多かったが。

9月1日

もう学校行きたくない。今日教室に入ったら私の机にゴミと落書きと花があった。男子が落書きしたみたい。死ねとかブスとかいっぱい書かれてた。

先生がきて みんな知らん顔。

先生は

「町田さんをいじめたのはだれ!？」

っておこった。でもだれも手を上げない。先生は

「手を上げるまで帰れませんからね！」

って言った。それでもみんな手を上げない。

そしたらだれかが

「町田クロスぞ！」

って言った

みんなが笑ってた。

先生はずっとおこってたけど、だれもけっきょく手を上げなかった。

帰り道、岡本さんと井上さんと夏子ちゃんにつかまって、ひもで作った首つり自殺のなわを首にかけられた。死ねとかいっぱい言われた。

綾子は日記を勢いよくボタンと閉じた。

しばらく目を閉じ、荒くなってた呼吸を整えた

そうだ。

たしか…多分縛り方間違えてたのか、紐は私の首を絞めなかった。けど…

執拗に追い回された。

走って逃げ回った。

背の高い草むらの中に逃げ込んで隠れてた。

いっぱい虫に刺されて痒かった。

けど出て行けばいじめっ子達に見つかるから、体を丸めてしゃがんでた。

声を殺して泣いてた。

どうして私が!?

なんで!?

なんで!?

ずっとこんな事を思ってた。

綾子は布団をかぶり丸く縮こまった。

息が荒い。

目を閉じる

開けた瞬間、あの草むらの中に居たらどうしよう…

勢いよく布団から出る。

周りはまた自分の部屋。

24歳の私の部屋。

心拍が上がっている。

日記はきつと、この先も鬱になるような事ばかりが書き綴られていく事だろう。とても読む気になれない。

綾子は自分の習慣を恨めしく思ったが、親にも先生にも結局打ち明けられなかった悲惨な日常を唯一正直にぶつける事が出来た為、日記は無くてはならない物だった。

家族の前ではずっと明るい子で居たかった。

地獄のような教室での実態を悟られたくない気持ちが強かった…

大好きだった友達、みんな悪魔に変わった。

大好きな両親までもが、そんな弱くて情けない私を白い目で見る悪魔に変わって欲しくなかった。

昔はみんな仲良しだったのに…

第7話：子供の姿をした悪魔達（後書き）

今回、小学生らしさを出すのにかなり苦労しました。日記部分1日分で約2時間かかりました（笑）読みにくい文章ですが読んで頂いた方に本当にありがたい気持ちでいっぱいです。

第8話：静寂

チツ…チツ…チツ…チツ…

目が冴えてしまった。

時計の秒針の音がいつもより大きく感じる。

罵声も、馬鹿にした笑い声も聞こえてこない

この静けさは綾子に、いろいろな記憶を思い出させる。

傷だらけのランドセル

折られた鉛筆

隠され、ついに見つからなかった靴

「お前のせいでこうなったんだぞ!!」

それらが魂を持ったら…私に…こう言いにくるのだろうか…

思えば…無力な子供だった。

解決しようとする事を知らなかった。

ただ。

耐えるだけしか出来なかった。

だが、死ぬ事を考えた事はたくさんあった。

死んだら…どうなるのかな？

次の人生は幸せになれるかな？

両親はどう思うんだろ？

あいつらはどう思うんだろ？

やっぱり…嘲笑うのかな…？

普通11歳の子供が真剣に考える事じゃない。

私は…あの時からどう変わったんだらう？

大人になって何が変わったんだらう？

チツ…チツ…チツ…チツ…

秒針は確実に地獄のような過去を遠ざけていく

記憶は生々しく鮮明に残っているが。

綾子は目を閉じる。

チツ…チツ…チツ…チツ…チツ…

明日。公休で良かった。

チツ…チツ…チツ…チツ…チツ…チツ…チツ…

眠れなさそう。

あ、そうだ。

そういや…英雄と式場に打ち合わせ行くんだっけ…

いよいよ、3か月前になった。

早いな…。

昔の私は、まさか自分が結婚出来るなんて思ってなかっただろう。

気持ち悪いとか、ブスとかずっと言われ続けてたからなあ…

確かに今も、あんまり可愛くはない。

よく英雄は私なんか結婚して欲しいなんて言ってくれたなあ…

頭が英雄の事に切り替わってきた。

少しずつウトウトしてきた。

やっと昼間の疲れが体に出てきた。

綾子はいつの間にか寝てしまった。

…目覚ましをセットせずに。

11時頃。家のチャイムが鳴る。

母が小走りで玄関に出ると、寒がりの為、かなり厚着の英雄がガチガチ震えながら、

「おはようございま〜す！」

と白い息を吐きながら笑顔で母に挨拶する。

「あら、おはよう！英雄くん。まあ、寒いから入りなさいよ、もしかして綾子と何か約束してた？」

母も笑顔で英雄を家に入れる。

「はい。…あれ、まさか寝てます？珍しいなあ〜」

英雄は吹き出すように笑う。

母は

「もつっ！あの子ったらだらしないんだから！起こしてやってくれる？全く…」

英雄は笑いながら綾子の部屋に入る。

何度も来た事もある部屋。

いつもより散らかった。

綾子は熟睡していた。

「おっおっ。よう寝てる。」

段ボール箱に躓く。

「うおっ?…なんだこれ…ノート?」

夜中、綾子が勢いよく閉じた日記。

あの日記。

英雄は綾子の様子をそーっと伺う。

ちよつとだけ。

2時間も遅刻した罰だっ。

英雄は含み笑いをしながら綾子を時々チラチラ見ながらあの日記を
読んでしまうのだった…

最初の方は笑顔で読んでいたが…

7月4日

そこから英雄の顔色が急激に変わった。

凍り付いたように…

第9話：発覚（前書き）

今回は英雄視点の話です。

第9話：発覚

テレビの音で綾子はようやく目を覚ました。
コタツに入りテレビ見ながら、おそろく母の差入れのリンゴを頼張る英雄に気付く。

「…！あれ…まさか…ああっ…！」

やっと起きた…

英雄は振り向きニタニタしながら

「おはよう。今、何時だい？」

「じつ…！ごめんっ…！すぐ着替える…！」

英雄は慌てる綾子に

「ゆっくりでいーよ。俺リンゴ食ってるから！」
と優しい笑顔。

英雄は綾子が隣の部屋に入った音を聞いて表情を変える。

綾子が慌てて顔を洗ったりしている…

お義母さんに怒られている…

英雄は、段ボール箱に戻した日記の信じられない内容を思い出す。

てつきり…子供らしいかわい日記になっているんだろう。遅刻の罰でちよつと冗談でからかってやるうと思つて…ほんの出来心で見ってしまった。

そっぴや彼女は…いつもなんとなく感じていたが…自嘲癖があった。もっぴ自信もてばいいのに…何も知らなかった俺はいつもそう思っていた。

今…とても冗談で書いたとは思えない日記を見て…理由がやっとわかった。

「英雄。ごめん！用意出来たよ！」
綾子が慌てて戻って来る。

いつも通りにしていよう。
英雄はゆっくり微笑んで

「んじゃあ、式場行くかあ！」
と車のキーを出す。
義母に

「ご馳走さま」
と挨拶し、綾子を乗せて車を走らせる。

式場で招待状の相談と衣装合わせを済ませ、早めの夕食を取る。

綾子は俺が日記を読んだなんて全く気付いていない感じだ。

騙してゐみたいで気が引ける。

今思えば…岡本の話をした時…ちよつと怯えた顔をしてた。

俺は馬鹿だ。

どうして気付かなかった？

モヤモヤする。

隠し事をされてる気分にもなってくる。

俺にもよくわからないが…

いつもは駅で別れるが、俺はいつの間にか綾子の言葉を待っていた。

俺から聞ける内容じゃあない。

解ってる。

でも…

あえて駅前を通過する。

綾子の口から聞きたい。

英雄がイライラしたような雰囲気を出しているのに綾子も気付く。

「あれ？駅過ぎちゃってない？どうしたの？」

ダメだ…。

どうしても見なかった事に出来なさそう。

俺が日記の話をしたら…綾子を傷つけるのは判ってる。

でも…

顔が引きつる。

「…許せないな。」

英雄はそう呟き、近くの店の駐車場に車を停めた。
何の事か気付かず綾子はキョトンとしている。

英雄は自分の複雑な感情に耐えられなかった。

「綾子。ごめん。…俺、今朝お前の部屋にあった日記見ちゃった。」
「…!!」

綾子はやっぱりショックを受けたようだ。

一瞬にして顔色が変わった。

鈍い俺ですらすぐ判る

英雄は綾子から目を逸らさないまま

「許せないな!…岡本って奴もその仲間も!…でも…」

英雄は少し辛そうに

「お前にもショックだったよ…!どうして打ち明けてくれなかった!?...俺、信用されてない?...俺、そんなに頼りない?...」

綾子は何も言えずに震えている。

目には大量の涙が溜まっている。

ああ…感情、ぶつけてしまった…俺が傷を抉っている。かなり余計な事を言っただけを抉っている。

綾子はやっとなげ出したような小さくかすれた声で

「…ごめんね…嫌われたくなかった…」
と、咳き大量に涙を落した。

泣かしてる…

自己嫌悪。

英雄は力無く俯いた。

冷静になつてくる。

よくよく考えると、こんな事打ち明けるのも綾子次第なのに…

子供か？俺は…

無言状態が続く。

暖房が効いてるのに体が冷たくて空気が重苦しい。

そんな空気を破るように英雄はゆっくり顔を上げて綾子を見た。

「…なんか…さ。上手く言えないけどさ…。お前が傷ついてきた事、とても他人事になんか思えない。…俺も同じ事やられたような気持ち

ちになつてる…」

英雄は綾子の震えの止まらない手を包むように強く握った

「俺…勝手な事言ってるね…ごめん。でも…お前の事判つて良かったなんて言つたら…怒る…？」

綾子は顔を上げて首を横に振る

「ごめんね。…こんなに心配してくれてるのに…英雄の事、ちゃんと信用してるよ。だから…今度から何かあつたらちゃんと全部話すね…ありがとう…なんかさ…恥ずかしいっていつか…情けなくて…ごめん…」

少しずつ綾子の表情が柔らかくなってきている。
良かった。

英雄も綾子の頭を撫でて

「もう…無理すんなよ…何かあつたらすぐ言えよ…それに情けなくなんかないよ。今まで引きずりながらも、ここまで生きてきたんだし。俺がエラソーに言える事じゃないけどさ…」

綾子は首を振る。

英雄も、モヤモヤした感情が晴れてくる。

少しずつ笑顔になってくる。

「じゃあ…約束な。傷は分け合おう。頼りないけど俺はお前の事をちゃんと理解するから。…だから…もう後ろ向きになるな…なっ？
なっ？」

綾子は泣き腫らした顔で精一杯大きく頷いて笑った。

良かった…打ち解けた…

綾子を送った後。

英雄は一人車の中で明日からの事を考えていた。
変に岡本に干渉するのは良くないな…

でも…確か…岡本って…！

英雄は先日、人伝に聞いた噂を思い出す。

まあ…どっちにしろ…綾子が嫌な思いしたら助けてあげればそれでいいか…

英雄は険しい表情をした。

第10話：噂

あのあと。

車の中でずっと昔の話をしていた。

今の心境とかも…。

英雄はずっと頷いてくれた。

受け止めてくれた。

私は英雄に本当に大切にされてる。

独りじゃなかった。

今思えば…あの傷つけられたランドセルや、上履きで帰宅した事、鉛筆をまた買ってきてくれた事。

両親は学校で起こっている事を知っていたのかもしれない。

よく考えれば…担任の先生が家庭訪問で言わない訳がない。

もしかしたら…私を傷つけないように見守っていてくれたのかも知れない。

あの後英雄が言っていた事だ。

英雄は俺は馬鹿正直だから言っちゃったけど…本当はそつとしいてあげた方が良かったかな…と言っていた。

暗闇に光を見つけ出したような気持ちだった…

生きてきて良かった…。

未来を諦めないで良かった…。

本当に久しぶりに綾子の表情は穏やかだった。

また、あの営業課の事務所には岡本が居る。

別にいい。

昨日英雄から言われた。

「さつきから勝つだ負けるだ言うけど…戦わなくなっただっていいんじゃないか？こたわってると…お前の性格曲がっちゃうし…それこそいじめっ子の発想だから…俺、綾子には悪い奴になって欲しくないよ。つう事で、んな奴ほつとけ！」

私…いじめっ子になる所だった…

いつの間にか歪んでた…

指摘されなかったら…人から本気で恨まれる人間になってた…

この前、嫌がらせみたいなお仕事しちやっただけど。

いろいろ考え事しながら出社する。

いつも通りに仕事が始まり…昼休みになる。

さて。食堂行こう…

ボールペンを引き出しにしまい、席を立とうとした…その時。

トゥルルル…トゥルルル…

綾子のデスクの外線用電話が鳴る。

綾子は受話器を取る。

電話の相手はしっかりした口調の女性だった

「もしもし…南保育所ですが…営業課の岡本さんよろしいですか？」

保育所？

確かに電話の向こうで子供の声がする。

「はい。少々お待ち下さい。」

綾子は、まだ気まずさは拭えず、機械口調で

「岡本さん、外線です。」

同い年なのに敬語。

岡本も相変わらず無言で暗い表情で電話をつなぐ。

だが。

電話にでた瞬間。岡本の表情が変わった。

なんか…焦ってる？

綾子は気になったが、食堂に向かった。

食堂では後輩の女性社員達がお喋りしている。

「あ！せんぱい！お疲れ様です〜！」

そしてもう一人が綾子に

「営業、大変すか〜？そーいやー営業課って、あの人がいますよね？」

綾子はすぐに見当つくがあえて知らん振りをする。

「え？あの人？誰の話？」

「あの…変な人！岡沢さんだっけ〜」

…岡本。

綾子は心の中で静かにつっこむ。

「なんかウチらの所にもいろんな噂が流れて来ますよ〜」

綾子は少し気になり

「え？どんな？」

と彼女達の隣の席に座る。

「ええつとあゝ何かの危ない系の宗教はいつてるとかあゝ」

「まさかゝ！アハハ。ウチは女にダメされて貢がされてて、その後捨てられてあゝなったとか聞いた事あるゝ！」

「うつわゝ、どんだけ性悪女なんだよゝあと、ウチ嫁さんに逃げられて子供育ててるとかあゝ聞いたよゝ」

子供！？

今までののだろうかと思っただが…

南保育所…

子供…

奥さんに逃げられた？

また…何とも言えない気分だが、この会話の中に居たくない。

英雄が通り掛かってくれたので逃げるように女性社員の輪の中から脱出する。

その後、英雄といつもと変わらない雑談したあと、昼休みが終わり、デスクに戻る。

事務所は皆出払っていて誰も居なかった。

綾子はのびのびとストレッチし、引き出しに隠してあるチョコレートポイツと口にほづり込む。

そのチョコレートの箱を横から勝手にガサガサ漁る手。

「うおっ！このチョコ俺の好きなやつ！冬季限定のやつ！」

見上げるといつの間にか石渡が居て、勝手にチョコレートをポイツと口にほづり込んでいた。

「チョコ泥棒！」

「まあまあ。いーじゃねーか1個ぐらい。…町田。悪いが、岡本の書類…頼んでいいか？」

岡本の書類？

石渡は不思議そうにする綾子にちよつと困った顔をして、

「知らないか？あいつん家…父子家庭なんだよ…」

そうなの！？

石渡は同情するように

「あいつ…家の事情グチャグチャでさ…」

石渡は綾子の隣のデスクに座る。

「さっきな、子供が熱出したって早退してな。」

だからあんなに血相を変えて…

保育所に子供を預けてる父子家庭って事は…

両親とも同居していないのだろうか…？

取りあえず、岡本の書類を仕上げる。

まさか、私が代わりに引き継いだなんて知ったらどんな微妙な表情をするんだろ…？

帰りの電車内では岡本の事が頭から離れなかった。

なんで気になるんだろう。

噂の真相が…

これまで不思議に思ってた事も久しぶりに頭に浮かんでくる。

なぜ…岡本は自ら石渡マネージャーに私と接点ある事を言ったのか？

私は…また、昔みたいに悪意があって、周りに仲間を作り、私を陥れようとしてたのかと思った。

その割には…何も起こらない。

接点がある事だけ告げて過去には触れてないみたいだし…

わからない。

彼は何がしたいんだろう。

私を今まで散々執拗に追いかけてきた者が…意味深な行動だけ残して影を潜めている…

わからない。

私もよくわからない…

私。何がしたいんだろう。何を知りたいんだろう。

噂の真相を知って…敵意が無いのを確認して…安心したいのかな…？

部屋のコタツに小学校時代のアルバムを置く。

ああ…一人だけ笑ってない。

さえない顔した私。

そして…

明るい笑顔の岡本。

ブーン…ブーン…ブーン…ブーン…

携帯が鞆の中で鳴っている。

あ、英雄。

「もしもし？」

かなり通る声で

「お疲れさーん！俺、今終わったよ！今日はどうだった？嫌な思いしてない？」

綾子は少し考え

「英雄…別に嫌な目にはあってないんだけどさあ…今、長電話平気？」

「ああ…何かあった？」

「あのね…」

綾子はまた卒業アルバムを開いた。

第11話：推測

英雄に今日聞いた岡本の噂を話す。

「うん…まだ深入りするのは怖いんだけど…気になる。」

「まあ…なんつうか。女って噂話が好きだよなあ…でも俺も綾子の話聞いてから岡本の件…気になっててさあ…。脅すつもりはないけど…万が一。奴が綾子に何かして来た時に弱点握つとけば叩き付けてやれるかも知れない…」

「万が一…何かって…！」

英雄の声が説得するような口調になってくる。

「正当防衛だろ？奴はまだ本性…周りに隠してるかもしんねーだろ？一人の人間を集団でいじめなんかした女々しい奴だぜ…ズル賢いかもしんねーだろ？社会人になっても懲りずにそんな事…そんな事しやがったらなあ…」

英雄はどんどんヒートアップして来ている。

「あ…ちよつと…落ち着いて！ほっとけって言ったの、ひで…」

「ほっとかれていい気になって同じ事してきたら…くっそあ…！ナメやがって…！俺は本気で」

「英雄…！！」

英雄はやつと冷静に戻り、

「あ…ごめん。…そうだな。まだ何かされた訳じゃないしな…俺が下手に出てった所で困るのは岡本だけでなく、綾子も…会社も困るもんな…」

ああ…止めて良かった…

…というか、何をしようとしてたんだろう…

ある意味英雄も地雷だ…

英雄は落ち着いてきた口調で

「その為にも自己防衛っていう意味で聞きたい。綾子の事。他人事なんかにとっても思えない。」

味方してくれてるのも、助けてくれようとしての気持ちもすごく伝わってくる。

むやみに喧嘩売ったりは…しないと信じる。

綾子は手元がそわそわしているのか。小学校の卒業アルバムと一緒に入ってた1冊の本のページのページを手癖のようにいじっている
動揺している。

落ち着かない。

また話すのが怖くなってくる。でも…ここで違う話に逸らすとあんなに心配してくれた英雄に失礼かな…。

何かあったら必ず話すって約束もしたし…

私の事。他人事じゃないって言ってくれたし…

そのまま綾子は英雄に、昼休み後輩達から聞いた噂話を一つずつ思い出し打ち明ける。

「噂話は3つ聞いたの。1つ目は…『何かの危ない系の宗教に入ってる』って…」

英雄は冷静に

「そしたら…お前にとって不利な話を社内でしないのは納得できる。お前を元同級生だからって勧誘出来なくなるからな。…入るなよ！」

綾子は英雄と電話しているにもかかわらず、首を必死に横にふる。

「ないない。それと…2つ目は…『女にダメされて貢がされて、その後捨てられてあーなった。』」

英雄は同情するように

「あーら…そりゃ可哀想に…女は怖いからなあ…お！俺はそこまで馬鹿じゃないぞ！馬鹿正直だけど。」

「…あ、そう？」

きいてない。と心の中でつぶやく。

それよりも…もっと意味深で信憑性のある噂。

綾子は深呼吸する。

なぜか緊張する。

「3つ目は……」嫁さんに逃げられて子供育ててる。『

英雄は電話の向こうで、一瞬息を止めたような反応をした。

「……!」

「!?!?…どうしたの?英雄?」

綾子のさっきからそわそわしている手元が止まる。

「…綾子。その話は…似たようなのを俺も聞いたことある。」

綾子は核心を付かれたように硬直する。

再び綾子は深呼吸し、

「実は…これは本当らしいよ…今日、石渡マネージャーが言った。

」

『知らないか?あいつん家…父子家庭なんだよ…』

『あいつ…家の事情グチャグチャでさ…』

『さっきな、子供が熱出したって早退してな。』

英雄は妙に落ち着いた口調で、

「俺はウチの、あの山口から聞いた。あいつなぜか噂に怖いぐらい詳しいからな……」

山口：ああ。英雄と同期の。私と英雄が付き合っているのを社内で一番最初に直感で見抜いた人。…本当こわい。

「あいつがどこからソレを聞いて来たのかはわかんねーけど…ソレが事実だったんだな…本当こわいな…山口。」

英雄は少し唸り

「…父親…なのか…。生活費、養育費…随分かかるよな……。離婚してたら、場合によっちゃあ慰謝料払ってるかも知れないしな…」

そして、

「綾子。俺の推測にしか過ぎないけどさ。…俺、岡本が悪意があるんだろうがなかるうが、…お前を不利な状況に陥れる可能性は…低いと思う。」

ええっ!？

綾子はまたページを手癖のようにいじり出す。

おちつかない。

「どっして?」

英雄はさっきまでよりもずっと冷静に

「奴…入社してから数か月経つけど…あんまり成績良くないだろ?」
そう言われると!

綾子の脳裏に、いつも上司に説教されている岡本の姿が映る。

英雄は続けて

「営業課ってさあ…歩合じゃん?成績良くななくても、自分に不向き
だろうと働かなければ…成績出さなければ金にならない。とても生
きて行けない…まだ身軽だったら仕事をとっくに変えてるだろうよ
…岡本は、辞める事が出来ない。」

「…!」

不思議に納得できる。

英雄は更に続けて

「よーするに。岡本は会社をよっぽどの事がない限り辞められない。」

…その会社にお前がいた。…悪意があるとしても、お前を不利な状況に陥れようとするのは、お前が先に入社してたから！」

「…！そうね。周りに顔が通るようになってるし…悪さしても逆に岡本さんが不利な状況になる。…たしかに！」

「…岡本にとつても綾子。お前は地雷みたいな存在だろうな…下手に刺激なんか出来ないだろう。…生活していけなくなるわけだし。」

なるほど…！

「だから…岡本に関してはあまり心配なさそうな気がする…」

綾子はいじっていた手を止めて、ふと、その本をみる。

「まあ、心配なさそうだよ。綾子は普通にしてりゃいいんだ。ビクつく理由なんか無い。悪い事してないだろ？」

「そうね…うん！」

綾子はさっきまで手癖で触れていた本を何気なくめくる。

英雄は電話で今日あった事を話している。
話題が切り替わりかけている。

岡本の件は解決したつもりみたいだ。

たしかに心配なさそうだ。

これ以上自分を追い詰めるように怯えていても、精神的に良くないだろう。

英雄がまた気を利かせて話を逸らしてくれていた。

けれど。

綾子は次に、このさっきまで手癖で触れていた1冊の本の事に違和感を感じていた。

なにか…ちがう…？

英雄との電話も終わり、本格的に本に見入る。

おかしい。

ある筈なのに。

どうして？

綾子は再び携帯電話を握るが…

再びテーブルに置いた。

こんな事でまた英雄に電話するのも悪い…。

そしてまた本に目線を向ける。

その本は

「南中学校卒業アルバム」
だった…。

第12話：出口

綾子は中学の卒業アルバムを最初から見直す。

…おかしい。

映ってるはずなのに…

…？

5クラスの全ての生徒をチェックした…

あの夏子ちゃんは金髪・ピアスの…いわゆる不良生徒。肌が真っ黒だ…。なんか彼女と同じクラスのおとなしい女の子に恐喝していたらしくて補導されたって話を聞いた事ある。…関わらなかつたけど…彼女はきつと今ごろも弱い人に付け込む事しか出来ない、ひねくれた大人になってしまったのであろう。

杉田君…ああ…たしか…いつからか学校来なくなっちゃったって聞いた事ある…載ってるのは1年生の…それも生徒手帳の写真だ。学ランの襟に1年生の学年証がついている…なんで来なくなつたかなんて知らないけど…。

めくるたびに当時のいじめっ子が出て来るが、運良く同じクラスに当たった事が無い。

だが、綾子の探している人物は5クラスのどこにもいない。よく考えると…彼も中学から1度も同じクラスになつてない。

なんでだろう…？

岡本敬二はどこにもいない。

住所録を見ても…顔写真を見直しても…

もしかして…転校した？

転校…

『あいつ…家の事情グチャグチャでさ…』

綾子は石渡のセリフを思い出す。

家庭の事情で転校…？

グチャグチャでさ…って。

たしか…子供を保育所に預けながら仕事して…営業課の定時は確か18時…

だからか！

無理に不向きな営業課を選んだ理由…！

子供の…為…？

岡本が部長や上司に説教されている場面

俯きながら食堂に一人座って、ひたすら周りとの接触を断ち切るように食事をしている姿

周りの社員達と関わらないように逃げるように退社する姿

私の昔の姿と酷似している気がする…。

綾子はアルバムをめくりながら、考え事をしていた。

同じような境遇

私は…支えている物がなかった。

彼には子供という大切な存在がある。

あの時の私には…なかった。

いや、…あった。

明るい子という虚勢を両親の前で張ってた。

私を支えてたのは…人を信じる事の出来ない下らないプライドだけだった。

子供の為に…岡本は自分を犠牲にできる人だった…

綾子はアルバムを静かに閉じた。

私は何も変わっちゃいない。

大人になっても…何一つ強くなんかなってない。

この前…石渡マネージャーや岡本の前で堂々と話た。…たしかに。
でも…これもまた虚勢を張ってただけだった。
証拠に隠していた手は震えていた。

なぜ虚勢を張る…？

傷つきたくないだけだからだ。

英雄にすぐ告白出来なかったのも…

自分のプライドを優先してただけだった。

結果、英雄に余計に心配かける事になってしまった…

『勝ち負けになぜこだわる？』

英雄の言っていた意味がようやく理解出来た。

って事は…

英雄は更に答えまで出してくれていた。

『悪い事してる訳じゃない。堂々としてろ。』

前向きになれ！

って事…

私はいつの間にか、ひねくれてしまっていた。

岡本の事。

知りたかったのは…

心の底では彼の事を
理解したかったからなのかもしれない。

過去の私と同じような思いをしているだろう彼と話がしてみたかったのかも知れない。

もしかしたら…今の彼は私の気持ちも理解してくれるのかも知れない。

私は彼と友達になりたいのかも知れない。

そこまで到達するのに時間がかかった。

周りから見れば、お人好しとか、変な人間かも知れないけど…

これが今の素直な心境だ。

英雄にメールを送った。

今の心境そのまんま。

すぐに、メールじゃなくて電話がかかってきた。

「まずはタメ口きいてみな
つて。」

そして

「こだわらない素直な子は好きだな
と…」

つけくわえて

英雄は本当驚く話をしてくれた。

「実は俺も今同じような事考えてたんだ。事情持ちなのを支えてや
れるかもしれないし。…本当。お前と考える事一緒だよなあ〜」

良かった。

わかってくれた。

この先、ここまで私を理解してくれる人なんてそう出会えないだろ
う。

英雄と出会えて良かった…

そう思いながら綾子は解放されたかのように優しい表情で目を閉じ
た。

悪魔だらけの、恐怖の部屋。執拗に叩き付けられる視線、悪意。

その13年間も閉ざされてた扉が開いた。

扉の向こうは人並みの幸せという眩し過ぎるぐらいの光が見える。

それに手を延ばすのをためらった。

その子供の姿をした悪魔達に押さえ付けられてると思ったから。

でも1歩進んでみると…悪魔達がもう居ない事に気付いた。

更に1歩1歩進むと部屋が薄れていった。

そして…光は目前に迫って来ている。

そして気付く。

あの部屋も、悪魔達も、私が見ていた幻にしか過ぎなかったのだ。

私は過去に閉じ込められていた。

過去の教室に閉じ込められていた。

翌朝。

タイムカードを押した所に、おそらくほぼ徹夜で子供を看っていたのだろう、目の下にクマができて、より一層顔色が白くなっている岡本が相変わらず俯きながら歩いてくる。

綾子は少し深呼吸をし、前に出る。

そして

「おはよう。」

と岡本に声をかけて事務所に歩いて行った。

もう、昨日の機械的な話し方ではなかった。

自然と優しい表情でここに来て初めて話した。

話した内に入るのかわからないが。

岡本は一瞬この一言に驚いたような反応をしたが、綾子が通り過ぎた後、ボソツと小さな声で何かを言っていた。

綾子は気付いていなかった。

岡本の表情は確かに変化していた。

第13話：罪悪感（前書き）

13話目は岡本が主人公です。

第13話：罪悪感

ジリリリリ…
ジリリリリ…
ジリリリリ…

カチツ。

ドタドタ足音が耳元でする。

「パパ〜!!」

「また遅刻するよ〜!」

うそつけ!

俺はまだ1回も遅刻はしてないぞ!

ほぼ徹夜で看病していた為、朦朧としながら眠い目を擦る。そして目の前の病み上がりお騒がせ息子・友喜に微笑む。

「ともくん、おはよう。熱はもうないの?」

友喜もすっかり良くなったみたいだ。俺が残業になって遅くなった時は石渡先生が家まで送ってくれる。

先生の旦那でもあり俺の上司でもあるマネージャー夫婦には本当に感謝している。

「うん！」

昨日また石渡先生に言われちゃったけど…栄養が偏っているんじゃないかって…やっぱり…母親は必要なんじゃないかって…でも…

「けーくん〜！ごはんですよ〜！」

金魚のけーくんにエサをあげる友喜を見つめる。その名前はやめろって言ってるのに…。

この子も一人ぼっち…か…

家に一人、俺の帰りを待っている友喜が一人ぼっちで居るのも可哀想だから、金魚を買って来た。犬猫だと世話が出来ないし、このアパートは動物が飼えない。

「けーくん行つて来るね〜！」

友喜はけーくんに手を振り、俺と家を出る。

いつも友喜は繋いでる手の力が強い。

まるで俺の手で握力測定しているようだ。

友喜は保育所で覚えてきた歌を歌っている。歌詞をよく聞くと時々間違えているのか日本語になってない。

そんな友喜の歌を聞いてると時々笑いの不意打ちをされる。

「アハハ…ともくん、歌詞違うんじゃない？」

友喜は真顔で

「ううん、あってるよ。」

…と意味不明な歌をまた歌いだす。

それを聞いて時々不意打ちされながら保育所に送る。
それから会社に行く。

この時間だけが今の一番の楽しみだ。

仕事中はいつも…どうしても気が抜けてしまう。

病院の先生は俺の事

「心の風邪」

って言った。

多分…いや、

あの時からだろう。

ぼんやり歩いていた。

社員達と何人か擦れ違った。

あ…しまった。

また挨拶しそびれた。

また…主任からなんか言われるな…

気が重い。

あ…

町田…

タイムカードを押している町田が前方にいる。

どうしよう。

少ししてから押そうか…

少し歩くスピードを落とす。

その時。

町田は振り返り俺を見た。

「おはよう」

俺の思考も動きも止まる。

え…！？

今の、俺に？

町田はそのまま事務所に向かって歩いて行った。

「…おはよう！」

返事をしたが聞こえていただろうか？

前にもこんな心境になった事があった。

なんで…

あんなに強気でいられるんだ？

怒ってないのか？

恨んでないのか？

立ち止まって動けない俺の横に石渡さんが居るのを気付くのに時間がかかった。

「岡本！」

慌てて横を向く。

石渡は心配そうに

「寝不足…みてえだな。どうだい？友喜は？」

「心配…かけてすみません…友喜はもう熱も引いて保育所あずけて来ました…」

石渡は大きく頷き

「そっかいそっかい！良かったなあ！まあ、気をつけて観てやれよ。」

そして、

「昨日、町田にお前の引継ぎ頼んだから、あとでお礼言っとけよ」と言い、会議室に入って行った。

町田が俺の分を…！？

そのあとは町田の事で頭がいっぱいになってしまった。

町田は電話対応に忙しい。

今、お礼言に行けないし…
当たり前的事言に行くのに…

周りが気になって行けない。

なんでだ…？

答えは至って簡単だった。

後ろめたいからだ。

午前の分を片付けて…昼休みに食堂か…

食堂には更にいろんな社員達がいる。

これも自業自得っていうのか…

結局、午前中は町田に話しかける事が出来なかった。

もうすぐ昼休みになる…

過去の後ろめたさと、今日のあの一言が頭の中をグルグル回っている。

町田もきつと俺に話しかけてきた時、戸惑っていたのだろう。

なのにあんなに強気でいられる。

ここで…真っ先に言う事は…

昨日のお礼でなく…

食堂で町田を探した。

案の定、周りには社員が数名いる。

だが、町田は一人で座っていた。

午後は外出。

今しかないだろう。

頭の中でセリフを考える。

ここに入社してからずっと言おうとしていたセリフ。

「…町田」

絞り出すように声を出す。

俺にも小さい声に聞こえる。

精一杯…

いや、いっぱいいっぱい。

町田は俺に気付いた。

うっ…

どうした!?

喋れよ!

俺!!

「お子さん…大丈夫?」

あ…

先に言われた…

「えっ…うん……もう、平気みたい。…あの…あのさ、昨日の書類、ありがとう…」

ああ…！

そうじゃないだろ…！

もっと言うべき事あるだろ…！

町田は首を横に振り

「気にしないで。」

と僅かに微笑んでいた。

俺はなんて小さいんだろう。

「…ごめん…」

町田は目を見開く。

「あの時は…ごめん…」

ああ…もうダメだ。

許してくれないのは解ってる。
でも、言いたかったんだよ！

これを言ったからって…過去が消える訳ないのに…
過去は消えない。

俺自身が一番痛感しているはずなのに…！

あの時の…

一番消したい過去が目の前を覆ってくる。

「薄暗い部屋の…」

「俺への手紙の横に…」

今、思い出すな!!

やめてくれっ!!

「うっん、もう、忘れたよ。」

ガツンと衝撃が走った。

目の前にはまた少し微笑む町田がいる。

「…ごめん…」

くりかえす事しか出来ない。

俺はこれを言って重荷が下ろせるとか思ってたんだろっか…

あ…

涙出て来た。

いろんな記憶が入り交じって混乱している。

町田が席を立っている。びっくりしてるな…。
また迷惑かけたな…。
周りもこつちを見ている気がする。

そこに背後から

「おっ！居た居た！！岡本くん！！」

町田もその声の主にびっくりしている。

思わず振り返ってしまう。

俺よりちょっと年上のメガネが印象的な男がネクタイを引っ張りながら、立っている。

「…！？」

当たり前前に驚くだろう。

だが、

「わっ！俺と一緒に外出がよっぽどショック？」

「…えっ！？」

「ひで…、いや、高橋主任？外出？」

高橋主任と言われたこの男は俺の肩を叩きながら、

「午後の外出、俺とだからよろしくっ！俺、外出初めてだし、名刺の渡し方ぐらいしかわかんねーから頼むぜ！」

町田は

「マズいんじゃない…？それ…」

と呟いている。

高橋主任は

「ジョーダンだよジョーダン！」
と笑いながら

「1時に車庫なっ！」
と言って去って行った。

周りもこのやり取りを見てて、大した事ないと思ったんだろうか。
いつもの空気に戻っていった。

町田も少し笑いながら、

「高橋さん、運転荒いから気をつけてね」
と言い席を立った。

真っ白な頭を仕事に戻しながら車庫に向かう。

そこには先程の高橋主任が立っていた。

「おっしゃあ！いくぞっ！」

と助手席に座った俺に1冊のバインダーを渡す。外出用の社用車を
使う時自分の名前を書く物だ。

「岡本君、ワリーけど2人分書いてくれる？」

俺は頷き

岡本敬二と書いたあと、高橋まで書く。

「あの…下の名前は…？」

「えいゆうって書いて英雄。」

わかりやすい。

高橋英雄主任は俺を乗せて車を走らせた。

高橋主任は相変わらず鼻歌を歌いながら、ちよつと雑な運転をしている。

ああ。たしかに。

さつき町田が言った事を思い出す。

鼻歌を歌いながら高橋主任は次の瞬間。

なごんできた俺の心臓を一瞬にして凍り付かせるような事を言い出した。

「岡本君ってさあゝ俺の彼女と同級生だってねゝ食堂で話してたあいつだよ。」

第14話・共通点(前書き)

引き続き、岡本が主人公の話です。

第14話：共通点

高橋主任は相変わらずマイペースな運転をしている。

俺は冷や汗をかく

この男…本当平静を保ってるけど…
彼女…って事は…

過去の事も知っているんだろうか…!?

赤信号で車が止まる

高橋主任は頭をかきながら

(わっ…)

俺と目が合う

「岡本君ってさ、タバコ吸う人？」

はい…？

「いえ、吸わないです。」

高橋主任は拝むようなジェスチャーをして、

「煙とか苦手だったら悪いんだけどさ〜吸って良い？」

「はい…」

高橋主任は

「ごめんね〜！」

と言いながら既に火をつけていた。

ちょっと拍子抜けしてしまう。

もしかして…知らないのか…？

知っているとしたら…間違いなく俺にキレるだろう。

俺が考えを巡らせている時。

高橋主任は窓を開けて

「そんでさ…昔の事聞いたんだ。」

イキナリ話を戻す

…！！

「あっ…！町田…さんに…」

聞きたいけど聞けない事を先に言われると余計恐ろしい。

冷や汗が首すじや額に滲む。

「ああ。」

しばらく沈黙が走る

先に出たのは高橋主任だった。

「さっきの食堂でのやり取りも聞いてた。」

「……………！」

なんだこの拷問みたいな空間は…！？

高橋主任は2本目のタバコに火をつける

俺は素直に認める。

逃げ場がない。

…いや、逃げるつもりはない。

「…悪い事…いや、取り返しのつかない事をしたと思ってます……
ごめんなさいじゃ謝り切れない事ぐらい解ってます…」

俺は背筋に走る寒気に必死に耐えているのか、無意識に握り拳を作っている。両手は力を込め過ぎてるみたいで震えていた。

すっかり血の気の引いて冷えきった背中に罪悪感という刃物を突き付けられている感じだ…

以前に2回…

この感覚を体験している。

町田と再会した時…

それと…

高橋主任はしばらく黙って俺の様子を見ていた。

「ふう…。」

溜め息をついている。

怒りを鎮めているのだろうか…？

ようやく高橋主任は口を開いた。

「これ以上責めないよ。…」

……………！

「…すみません…」

また沈黙が走る。

高橋主任の表情は徐々に曇って来ているみたいだ。

そりゃ怒るに決まってる。

俺はこの人の大切な人を罪もないのに執拗に苦しめた。

子供だったからって言い訳が出来る訳がない。

高橋主任は、まるで体の奥底からわき上がる何かをこらえているように見える。

相当怒ってたんだろう

少しずつハンドルを持つ手が震えてる。

こんなに怒りながらも俺をこれ以上責めないと言ってくれた。

俺は本当に小さい。

そして大人げない。

この人は大人だな……

俺は不十分なまま、そのまま大人になり、

……
俺自身の大切な人を

……

なくしてしまった!!!

頭をかきむしりたくなる衝動にかられる。

その時。

イキナリ、高橋主任はまた拝むようなジェスチャーをして

「岡本君!ごめん!コンビニ寄っていい?」

…はい!?

「さつきから腹痛くてさゝ我慢してたんだよゝ何時に到着予定だっけ?」

…腹痛?!

「…14時です。まだ時間ありますし…」

高橋主任は苦しそうに

「うあー…マジ痛え…ごめんなあ」

この人…

マイペースだなあ…

焦っているのか車の運転がどんどん荒くなる

「ちよっ…！ちよっ…！…！…！たっ…高橋主任！？」

ドウウン…

キキキッ！

ガーッ！

「おらあ…！どいてくれーっ…！」

反対車線へ、かなり無理に曲がりコンビニに停車する。

「岡本君！ちよっと待ってて…！」

そう言い高橋主任はダッシュでコンビニに突っ込むように走って行く。

「…はっ…ははっ…」

ちよっと笑ってしまっ。

さっきまで高橋主任に怯えてたのに。

高橋主任って…なんか不思議な人だな…

数分後

高橋主任は顔を赤くしながら戻ってくる。

「いや〜危なかった〜」

「良かったですね。大事に至らなくて…」

高橋主任は頭をかきながら

「あと数ミリの状況だったなあ〜アハハ！」

そしてイキナリ怖いぐらい真面目な顔をして、

「町田に絶つ対！に言うなよ！！」

「いつ…言いませんよ！」

てゆうか…言えませんか…

また高橋主任は笑いながら車を走らせる。

「岡本君は突っ込むのうまいね〜」

「…あ！いや、突っ込んでるわけじゃ…」

「誉められた事ない？」

「…ないです」

…ボケもツツコミも誉められた事ないです。

この癖は…やっぱり友喜と居るからだろうか。

あれ？

そういえば…

久しぶりだ…

…この感覚。

友喜以外とこんなに話してて楽しいのは…！

本当に久しぶりだ…

高橋主任は相変わらず鼻歌を歌いながら運転をしている。

「ところでさ〜」

高橋主任からきりだす。

「岡本君、似てるねえ」

誰に？

「誰に…ですか？」

「町田！」

「ええっ！？」

似てるのかな？

外見ではないだろう。当たり前だけど。

じゃあ…性格？

今の俺の性格じゃあ…可哀相だろう…

高橋主任は笑いながら

「気を許すと…イイ顔する。」

「…！？」

高橋主任は今度は何の断りもなくタバコに火をつけた。

「…あいつ、俺が苦手だったんだって。」

初めから仲が良かった訳じゃないのかな…？

「なんで…ですか？」

「どーやらさ…男性が苦手みたいで。」

昔の記憶か…

「初対面なのにだぞ！挨拶がてらに話しかけたらイキナリ半泣き！」

「…そりゃ…主任、余計な事言いまくってるから…」

…あ！つい突っ込んだじゃった！！

でも高橋主任は聞いてなかったみたいだ。

ホッ…

「俺ついムキになってさ…何かと接点作って、彼女に話しかけまくった。」

高橋主任は頭をかきながら

「そしたら…少しずつあいつの考え方わかってきてさ…」

「あいつ…人見知りとかじゃないんだよ」

高橋主任は少し悲しそうな顔をする。

「人嫌い。」

それは…！！

「それは…俺達のせいです…昔、集団で酷い事してましたから…」

すると高橋主任は急に真面目な顔をする。

「じゃあ…君も？」

「はい…俺もいじめていました…」

高橋主任は首を横に振る。

そうじゃないっていう風に。

「君も…人嫌いだろ？」

！！！

そういう意味か！！

「……………」

俺は言葉がまた出なくなってしまった。

喉に引っ掛かる。

そして強制的に飲み込まれる。

いつもそうだ。

きつと話せば楽になるだろう。

俺に同情する人も居るかもしれない。

でも…

俺の『風邪ひいた心』はそれを許してくれない。

沈黙が走る。

第15話・懺悔（前書き）

引き続き、岡本が主人公の話です。

第15話：懺悔

沈黙が走る

動揺しているのが黙っててもわかる。

冷や汗がにじみ出る。

どうして……？

この人は……？

その時。

高橋主任は慌てて、

「なんか…嫌な事ふれちゃったかな…ごめん…」

「あっ…いえ…」

俺は焦る頭を落ち着かせようとする。

高橋主任は申し訳なさそうに

「あっ…その…さ、ごめん。悪気はないんだ…」

「なんか…ごめん…」

高橋主任は何度も謝っている。

それほど俺が追い詰められたように見えたのか…

いや、実際追い詰められていたが。

とりあえず、この状況は回避できた…

でも…

俺は…

「あつ…いえ…」

取りあえずこの空気を何とかしよう。

体中の血液が顔の方に昇ってくる。

やっと循環してくれた。

高橋主任は、慌ててるのか車の運転がメチャクチャになっている。

ああ…この人すぐに表に出ちゃうんだな…

というか…!

この住宅街の細い道を物凄いスピードで走る危険運転をノンビリ見
てる場合じゃない…!

「主任…もういいんで…落ち着いて下さい…!」

「あつ、おれ？あ、ああ、へーきへーき！！」

だ…ダメだコリヤ…

歩行者とかも…俺も主任も現在生命の危機に瀕しているようだ。

「主任！鼻歌！歌いながら運転してください！！」

ああ…俺も慌ててる。

落ち着かせようとして、よく解らない事口走ってる。

友喜の顔が浮かんでくる。

…お前を絶対独りぼっちにするもんか！！

「うつ…うつたあ？」

「そーです！さっきまで歌いながら運転してましたよね？」

どーにでもなれっ！

「歌ってねーよ！」

うそつけっ！

そして高橋主任は俺に無理難題を押し付ける

「岡本歌えっ！」

「無理です!!」

その瞬間!

2人が一気に正気に戻る音が鳴り響いた

ガツガガガ…ゴリッ…
ゴゴゴツ…

無線機の音だと出来れば思い込みたかった。

「うあああーっ!!!??」

さすが行動が早い。

高橋主任はもう既に車を停めて左側に回っている。

残念ながら、この車に無線機なんか積んでいる訳がない。

現実には無線機の音ではなく、ガードレールと車の摩擦音だった。

擦っただけで済んで良かった…

俺は頭を抱えている高橋主任に声をかけようとした。

「…絵の具、ペンキ、修正液…」

高橋主任は証拠隠滅に悩み、ブツブツ呟いているが、あえてハツキ

帰り道。

今日一日の事を思い出す。

いつもは友喜の事ばかり考えてるのに。

今日同行した高橋主任や…町田。

久しぶりに…楽しかった。

楽しいって思った。

また…出来れば話してみたい。

話せる気がしてきている。

友喜を迎えに行つて、また握力測定しながら家路につく。

「ともくん、今日は保育園楽しかった？」

「うん！今日はねー給食にカレーがでたよ〜！」

友喜はえっへん！と言わんばかりに、

「ぼく、ニンジンちゃんと食べたよ〜！」

「おっ！偉いっ！今度パパおいしいハンバーグ作ってあげるから。」

おっきいニンジンいねちゃつぞっ!」

「ええ〜っ?おっきいニンジンやだ〜」

いつもどおりの会話。

友喜は俺の顔を覗きこむ。

子供はスルドい。

「パパ、会社でいい事あった?」

俺は友喜の勘のスルドさに一瞬ギクリとするが、

「うん。今日はパパ、面白い人とお仕事してきたよ。」

「なんてひと?」

俺はちよつと考えて、

「高橋さん。」

「たかかしさん?」

やっぱりちゃんと言えてない。

「じゃあ…」

『えいゆうって書いて英雄』

「ともくん、えいゆうさん。」

こっちの方が友喜にも覚えやすいだろう。

「えいゆうさん！」

「そう。えいゆうさん。パパは今日えいゆうさんの、お車に乗せてもらったんだ」

「へ〜！いいーなー！」

笑顔で俺の顔を覗く友喜。

親バカなのか、友喜の笑顔は本当に可愛い。

「いつ、ぼくん家にくる？」

おいおい。

「えいゆうさんはお家には来ないよ。」

「ええ〜っ？」

…来る訳ないだろ。

友喜にとっては世界中は皆友達。のような考え方になってるみたいだ。

俺にもそういう時期があった。

皆…仲良くしてくれる。皆…優しくしてくれる。

それが当たり前の事だと思っていた。

でも…

岡本敬二という少年は…

ある日突然、冷たい現実を見ざるえなくなる。

その少年が今まで見て来た…いや、現実だと思っていたものは…平和な家族劇にしかすぎなかった…

そして…

少年は、教室という名の地獄での恐怖を味わう事になる…

そして独りぼっちだったという現実を見なきゃいけなくなってしま
う…

「パパあ？」

友喜が心配そうに俺の顔を覗く。

ごめんごめん。

俺は友喜を絶対独りぼっちになんかするもんか。

「ん？なんでもないよ」

世界で一番幸せになってもらいたい。

でないと…

友香に合わせる顔がない…

帰宅し、一通り家事を済ます。

友喜は大好きなアニメを見ている。

横でそれを眺める。

そして一緒に風呂に入り友喜を寝かせる。

いつもは友喜が寝たのを確認した後、俺も眠りにつく。

今日はそんな気分にはなれないみたいだ。

横で眠る友喜を起こさないように、そつと筆笥の一番上の引き出しを開ける。

これも習慣になっている事だ…

『報告』

この時を俺は『懺悔』とも言つべきなのだろうか…

写真立てを見つめて目を閉じる

友香。

なんとなく…君には聞いてもらいたい…

前に会社で昔、俺がいじめていた同級生に再会したって言ったよね？
罰が当たったのかなって思ったって話した子…

その子が、今日、俺を許してくれたよ。

許してくれたのか…まだ疑ってる。

それと、その子の彼氏…他部署の上司なんだけど一緒に外出したんだ。

その彼氏に俺は謝ったよ。

その彼氏も俺をもう責めないって…

もしかしたら俺は聞いてもらいたいらしい。

全部話したからって、スッキリ簡単に解決出来る訳ない。

そんな軽い話じゃないんだ。

俺にとっては…

実は…当てられちゃったんだ。

俺が人嫌いつて。

凶星だったよ。

すごい人だよ。

俺…心のどこかでその人に頼りたいのかもしれない。

…打ち明けていいのかな？

君はきつとそんなの自分で決めなさいって怒るだろうね…
解ってる。

でも…俺、そこまで人間出来てない。

いつまでも頼り無くてごめん。

でも大丈夫。

友喜にはちゃんと幸せになっってもらおうから…

俺は缶ビールの蓋を開ける。

今日一日…何かの節目だった気さえしてくる。

ふと見ると、友喜は布団を蹴っ飛ばしお腹を出してスーッ寝息をたてている。

ともくん。パパ、情けなくてごめん。

友喜の布団を掛け直し、ビールの残りを一気に飲む。

「おやすみ。」

そう言っただけ俺も目を閉じた。

睡魔はすぐに俺を襲って来た…。

第16話：父親失格（前書き）

引き続き岡本が主人公の話です。

第16話：父親失格

今日も、いつも通り仕事が終わわり、いつものように保育所に友喜を迎えに行く。

そういえば…高橋主任と廊下で擦れ違った時。

「よっ！岡ちゃん！」

と何故かピースしていた。

岡ちゃん…？

なぜピース…？

本当…面白い人だな…

その時はそれだけだったが、俺は少し会社に行くのが楽しみになってきた。

町田とはまだあまり話してないが、この前の外出の事で、かなり謝ってきた。いや、あれは俺も悪かったって言ったけど…気にしてたかな…？

とにかく、少しずつ環境が変わり始めている。

不安にもなるが…期待もしたい…

明日は休み。

明日は一日中友喜に付き合おう。

軽い足取りで保育所の前に着いた時、友喜は泣きべそをかいていた。

俺は驚いて友喜に駆け寄る。

「ともくん…?」

友喜は俺に気付き、慌てて垂れた鼻水を拭う

「…おかえり! パパ!」

と、無理やり笑顔をつくる。

「なんかあったの?」

友喜は首を横に振る。

「ううん!」

ああ…誰かさんと一緒。

嘘は下手みたいだ…

「岡本さん。」

振り向くと石渡先生が立っていた。

「ちょっと…お話が…」

「はい…。」

友喜は他の先生に遊んでもらっている。

話…。

大体予想はつく。

石渡先生は悲しそうな顔をしながら、

「すみません。お仕事で疲れていらっしやるのに…」

「いえ…あの…友喜、今日、何かあったんですか？」

石渡先生は悲しそうな複雑な表情をこっちに向ける。

「ええ。岡本さんの事情も知ってますし…言いにくいんですが…」

俺は息が詰まりそうになる。

先生は続ける。

「今日、他のお友達に、母親がいない事でいろいろ言われちゃったんです…」

「友喜くん、最初はパパがいるからいいって言い返してたんですけど…その子にあんまりにも言われるから、ついに泣いちゃって…」

胸の奥がズキリと痛くなる。

「…そうですね…」

「ええ…。」

先生は氣遣ってくれてるのか、

「確かに良い子です。でも、良い子になろうと幼心に必死に言い聞かせようとしてるようで…」

「……………」

友喜…。

ごめんね…。

「余計な事かも知れませんが…再婚というのも、あの子にとっては良い事かもしれないと思うんです…気を悪くされたらごめんなさい…。」

再婚…か…。

「先生、どうもすみませんでした…やっぱり俺だけだと、良くないとは思ってはいるのですが…」

先生は

「ごめんなさい。あまり深く考えないで下さいね。一応、こんな事があったという事で、お父さんにはお話ししておいた方がいいかなって思ってます…」

保育所を後にする。

ああ…。
わかった。

いつも友喜は俺の手で握力測定をする理由が…。

「ともくん、今日何食べたい？」

「んっ？なんでもいいよ！」

…友喜…。

友喜は目を腫らしながら笑顔になる。

しかし、急に表情が曇る。

「パパ…」

「んっ？」

友喜は立ち止まり俯く。

「ぼくは…パパとけーくんだけでいいよ…」

…！！

友喜を抱き締める。

ごめん…！！ごめんね…！！

俺の顔は歪んでいた。

「パパ…？」

友喜も、そんな俺を見て複雑な表情をしていた。

ごめんね、ともくん。

俺は君のパパ失格だよね…

翌日。

友喜に今日はどこに行きたいかリクエストを聞いてみた。

南の島とかアニメに出て来る場所とか無茶な事を言われたが、池とボートのある公園を提案したらすぐ賛成してくれた。

その公園にはウサギ小屋やインコの小屋もある。
池にはいろんな鳥がいる。

しかも無料。

友喜もお気に入りの場所でもある。

友喜は嬉しそうに、けーくんに

「いつてきまーす！」

と挨拶していた。

俺と友喜の手作り塩むすびと麦茶の入った水筒を持って家を出る。

駅へ向かい、モノレールに乗る。

友喜はモノレールが大好きだ。

靴を脱がせて景色を見せてやると、食いつくように窓の外を眺めている。

わずか一駅だが、それだけで満足してるみたいで良かった。

てゆうか…本当は車に乗せてやりたいし、遊園地にも連れてってあげたい。

随分リーズナブルな子にしちゃったなあ…と、我ながら反省している。

122

公園には休日だからか、散歩に来ている人も多い。

ちょうどお昼時。

ベンチに座り朝2人で作った塩むすびを食べる。

空は雲一つない快晴。

横には自分で作った、ちよつとグチャグチャな塩むすびを食べる友喜…

幸せだなあ…

「うえゝ塩のでっかいの入ってたゝ」

と、エへへと笑いながら友喜はおにぎりを食べる。

ずっと…こういつのが続くといいなあ…

友喜も俺も年を取る。

いつか…今幸せを感じている事が、いろんな事を覚えていくに従って、当たり前的事と書き替えられて、幸せを感じなくなる…

それが怖い。

昨日の先生の言葉を思い出す。

いつか…友喜に母親という存在が必要になってしまつ時がきてしまつのだらうか…

友喜が離れてしまつのが…想像するだけで、心が痛む。

友喜が後ろを向いてるのに気付くのにあまり時間はかからなかった。

同時に、あの声がしたからだ。

「あれっ？岡ちゃん？」

友喜は俺とその声の主を交互に見ている。

まさか本当にご対面するとは…

後ろには、手を振るやたら厚着の高橋主任と町田が居た。

「何食ってんの？」

高橋主任は俺のおにぎりを覗きこむ。

そして、

「おっ？息子？」

と友喜に

「よっ！」

とジェスチャーする。

友喜が俺に似なかった所は人見知りをしない事だ。

「よっ！」

と高橋主任にピースをする。

町田もそのやり取りを見ていて、

「風邪、治って良かったね」

と友喜にニコニコしていた。

こら、照れるな。

友喜はモジモジしながらエへへと笑ってた。

少し離れた芝生の広場で町田が友喜と遊んでくれている。

高橋主任はタバコに火をつけて、

「いや〜、イイ天気だなあ〜」

とプカプカ煙を吐く。

「なんか…すみません。今日は遊びに来てたんですか？」

「ああ。綾子と式場行って打ち合わせしてきて、気分転換に来てたんだ。」

そっか…！

春に挙式って確か石渡さんから聞いていたな…

「おめでと〜ございます」

「どもっ！…まあ、いろいろ面倒だけどさあ。岡ちゃん、来てくれるよな？」

俺は高橋主任の意外なセリフに驚く。

「！呼んでいただけるんですか？」

「おう！息子も連れてこいや〜！」

高橋主任はタバコを加えながらニコニコする。

遠くで友喜が町田の服を引っ張りながら何か言ってる。

「あっ…おいつ…」

俺は慌てて止めに入ろうとするが、

「気にすんなって。綾子、子供好きだから。」

と、高橋主任に止められる。

「えっ…でも…ワガママ言っちゃってたら…」

俺はオロオロしている。

そして2人は俺達の所に戻って来て、

「岡本君、友喜くんウサギ見に行きたいって。行って来てもいい？」

町田の手をちゃっかり繋いでる友喜。

あらら…懐いちゃった。

「うん。ごめんね、折角2人で来てたのに…」

「うっん、全然構わないよ。」

友喜は町田の手をグイグイ引っ張りながら、

「いっっ！いっっ！パパ、お留守番ね！」

…はいはい。

高橋主任は

「父ちゃんとここにいるからなっ。」
と友喜にピースしている。

「うん！オツチャン！」

「こら、オツチャンは失礼だろ？ほら。えいゆうさん！」

高橋主任は合点がいったように

「えいゆうさん！」

と自分を指差している。

友喜はまた嬉しそうに

「えいゆうのオツチャン！」

とはしゃいでいる。

一言余計！

ま、何故か主任も嬉しそうだし、町田なんかお腹抱えて笑ってたし
…笑ってごまかそう。

2人はウサギ小屋のある方へ歩いて行った。

あの友喜の嬉しそうにしてる姿…

俺はやっぱり…

「岡ちゃん？どうした？」

高橋主任が心配そうに声をかけてくる。

「…あの…」

友香。

俺…もう一度、人に頼りたい。

高橋主任に

「実は…あの子の母親の事なんですけど…」
と切り出せた。

ずっと出たがってた言葉。それを塞いでたものから開放させるように…

第17話：抱えてきたもの

翌日。

綾子はいつものように出社する。

タイムカードの所で、岡本を、今度は綾子が見つける。

足音で岡本が振り向く。

昨日の公園での出来事。

昔の私なら想像も付かないだろう。

あの、岡本と、岡本の息子と遊んだなんて…

昔の私が知ったら何て思うんだろ…？

「おはよう。昨日はありがとう。」

今度は岡本から声をかけられた。

「あつ、いえいえ。」

少し岡本は笑顔になってるように感じた。

その笑顔が優しそうにすら感じた。

事務所で今日もパソコンと睨み合いをする。

もう…背中に嫌な気配は感じない。

悪い奴はもういない。

背後にいるのは、友喜くんの優しいお父さん。

綾子の仕事も順調に進んだ。

- - - - -

それから数週間後の昼休み。

いつもは食堂を使っているが、今日は天気も良いし、朝用のサンドイッチを買いすぎていたので屋上のベンチで一人で過ごす事にした。

風は無いが空気は冷たい。日差しは暖かい。

あゝもうすぐ春かあ…

式まであともう1カ月ぐらい。

招待状作りに追われる日々だったせいも、月日が流れるのが本当早い。

もうすぐ…英雄と夫婦になるんだなあ…

子供かあ…

友喜くんみたいな良い子がいいなあ…

私と英雄の子なら、きっとそそっかしい子になっちゃうな…

綾子がぼんやり空を眺めていると、足音が聞こえてくる。

あーあ…折角の一人の時間を誰かに台無しにされる…。

英雄は…寒がりだし、来る訳ないか…

じゃあ…

誰だろう？

足音は入口のドアの所で止まる。

「町田…」

岡本だった。

綾子は本当に意外な人物の登場にびっくりする。

「あれ？…どうしたの？」

岡本は以前より顔色が良くなったように感じる。

「ごめん。今、下で上っていったの見たから…あまり話す機会なし…」

岡本はちょっと緊張しているようだった。

つられて綾子も緊張する。

岡本は綾子と少し距離を置いてベンチに座る。

「この前は…ありがとう。あれから友喜、俺の顔見るなり『おねーちゃんは?』『えいゆうさんは?』って…俺に毎日チェック入れるよ。」

あの友喜君を思い出す。

それを言ってる様子が想像できて、クスクス笑いながら綾子は岡本に、

「私の事、覚えててくれたんだね…」

岡本も頭をかいていた。

そして、ちよっと寂しそうな顔をする。

「岡本君…?」

岡本は顔を上げて、

「実は…高橋主任には話したんだけど…黙っててくれてたみたいだから…聞いてないみたいだね。」

確かに、何も聞いてない。

綾子は岡本を見る。

「どっかしたの…?」

岡本は、

「高橋主任に話したかったんだ。それで…聞いてもらった…」

といい、姿勢を正して、

「この前の公園で…町田が友喜をウサギ小屋に連れてってくれた時。…俺、相談してたんだ。…家庭の事…ウチは…いや、友喜は…母親がいない。」

ドキリとする。

石渡マネージャーの言ってた事を思い出す。

父子家庭…

綾子は息を飲む。

多分これから自分には想像も出来ない事情を聞くことになる。

軽い気持ちでは聞けないだろう。

綾子は覚悟を決めたように切り出す。

「…家族…二人だけ…?」

「そう。…俺の妻…友喜の母親は………」

岡本の表情が固まる。

覚悟を決めたように吐きだす。

「…2年前に亡くなった。」

体中に衝撃みたいなものが走る…

綾子の声と言葉は完全に喉の奥に引っ込んでしまった…。

…えっ!?

亡くなった…!?

…予想外だった。

今決めていた覚悟じゃとても受け切れない。

空気が張り詰める。

岡本はちよつと俯きながら続ける。

「それから…家族は2人になった。…子供の世話なんて全く経験がないから、毎日が戦いだつた…泣いたらどうしていいか解んなくて泣きやむまで必死にあやしてたし……どうしていいか解らなくなつて途方にくれてたりしてたりしながらも、とにかく一生懸命だつた。…命つて…とんでもなく重いものだつて、毎日痛感してたよ。」

「…そつか…。」

綾子は精一杯のフォローの言葉を探す。

簡単に見つかる訳が無い。

やっと…絞りだすように、

「でも…何て言えば良いんだろ…今、友喜君が笑ってるのは、お父さんが頑張つたおかげだから……だから…」

奥さんだつて安心しててるよ。

と、言いそうになって、慌てて言葉を止めた。

今、奥さんの話に触れてはいけない！と何故か直感で感じたからだ。

その直感は後に当たるのだが。

岡本は少しうなだれながら、手を組む。

「高橋主任もそう言ってくれたよ…ありがとう。本当にありがたいよ。そう言ってくれる人がいるって…。」

岡本は組んだ手をまた組み直す。

「でも…友喜は良い子になろうとしすぎて。俺が必死になって、周りから助けられてるのを見てるから…幼いなりに思い詰めたんだろう…。友喜の為に…相手も居ないのに再婚も考えた。母親がいたら…あの子は幸せになれるだろう。けど…俺の存在ははきつと…薄れてしまうだろう…とか…。置いて行かれるのが結局怖いんだ…。そんな事思う俺は父親失格だよね…」

「そんな…こと…。」

岡本は綾子の言葉を遮るように首を横にゆっくり振る。

そして、

「あのさ…。石渡マネージャーから聞いてるかもしれないけど…マネージャーの奥さんは…俺の奥さんの血の繋がってる姉なんだ。俺にとっては義姉に当たる人なんだ。保育所の先生をやってる。その

先生の紹介で俺はここに入社してきた。…いろいろ助けてもらってる…。生活も…。友喜の事も…。保育所で母親代わりに接してくれる。

…妹を…死なせてしまったのは俺なのに…」

……！？

ちよつとまっつて！…！！

今…何て…！？

綾子は完全に固まる。

ピシッと空気が張り詰める。

寒いからとかそついうのじゃない。

今までに経験したような物ではなかった。

張り詰める空気を割るように岡本は握り締めた手を強く握りながら、

「この件は…友香…いや、妻の事は…実は主任にもこれは打ち明けてないし…先生にも話してない…。俺と…亡くなった妻しか知らない話なんだ…。きつと…耳を塞ぎたくなるような話だけど……」

岡本は眉間にしわをよせる。
泣き出しそうな表情。

きつと本人も話すのが辛いのだろうか…

それを…今。

何か思う事があって、私に切り出そうと必死で戦っている…。

岡本の様子からそう取れた。

「うん。」

…決して軽い気持ちではない。

…私に精一杯できる事…

彼の話…

いや、

彼を理解しようとする事。

岡本は一呼吸し、気持ちを落ち着かせようとしていた。

「俺が町田と再会した何日か後…。食堂でマネージャーと町田と俺の3人で話してた事あったよね？」

あの時

綾子の脳裏に石渡マネージャーと岡本の前で、強気な態度で

「同級生！」

と言い張った時がサツと浮かぶ。

今思えば…恥ずかしい。

岡本は続けて、

「…あの時…町田は多分気付いて無かったと思うんだけど…俺、中学は本当に最初しかいなかったんだ。」

綾子は岡本の写っていない中学の卒業アルバムを思い出す。

「…！！そっか…やっぱり転校…してたんだ…」

岡本は頷く。

「中学1年の6月。…中学でクラスが離れたし…気付いてなかったとは思ってたけど…。」

岡本は綾子を真正面で見ると。

「そこが…俺の人生の転機だったのかもしれない…」

ここからは…

綾子の知らない世界で生きて来て…

様子の変わってしまった彼の話が始まる…

彼にとっては重大な告白…

綾子は岡本の目を見て深く頷いた。

岡本は既に覚悟を決めたような表情で…
やがて静かに話し始めた…。

第18話：告白へ前編

話せば長くなりそうだ…

そう。

あれは…中学1年の6月だった。

お父さんから金借りてるって…母さんの所に男が何人か来てたんだ。

その日、母さんに母方の実家に…おじいちゃん、おばあちゃんの家に行くようにって言われたんだ。

その時は…何がなんだか解らなかった。

後々知った事だが…

何年も前から、父さんには愛人が居て、借金までして何万も貢ぎ込んでいた…母さんは気付いていたが、俺を傷つけないように気付かないフリをし続けていた。

今思えば…既に家族は壊れていたんだと思う…。

俺は父さんと母さんに…ずっと平和な家族劇を見せ続けられてた。

俺は父さんに会えなくなつた悲しさより…父さんが母さんを裏切つて借金までしてたつて事が…

辛かった。

あの日以来…父親には会ってない。

もう2度と会う事はないだろう。

そんな事があって…イキナリ転校させられて…

馴染めない学校に行けば…話す内容の話なんかないし、どうしていか解らなくなって戸惑った。

今までに見た事も接した事もない人達ばかりなんだ…。

顔を上げるのが億劫な俺はずっと俯いてたと思う。

無理して話すのが辛かったんだ…

そしたら…

周りは俺を置いて行った。

…クラスから見捨てられた。

嫌な学校が終われば…

誰もいない家に帰る。

母さんは俺の為に必死に働いてくれた。

母さんを心配させたくない。

だけど…

そのうち…母さんと会う回数も減っていった…

そして…

中学2年の春ごろ。

隣の席に1年の時同じクラスだった女子が、席に着いた瞬間…

ガガガッ…

…と机を離れた。

「うわ。隣の席マジで？」
って…。

その後近くの女子に、

「超やだ〜！なんでコイツの隣りなの？キモいんだけど〜！」

と大声で喋っていた。

その瞬間、頭が真っ白になって…

胸の底に杭を打たれたような衝撃と痛みを感じた…。

「うわ〜かわいいぞ〜！」

「キモいよね〜！」

見知らぬ女子からもイキナリ

「キモい」

扱いされて…

目の前が真っ暗になった…

それからだった。

教室に入るのがすごく嫌になった…

女子どころか…男子からも馬鹿にされはじめて…

体操服隠されたりとか…金を取られたりとか…

ひどい時には暴力も…

周りを見るのも怖くなって…

人前に出ると声が出なくなって…

2学期ぐらいには保健室まで行くのが精一杯になってしまった。

いわゆる保健室登校ってやつだ…。

保健の先生は俺をかばっていてくれた。

先生と他の保健室登校の1年生の女子の泣きながらの悩み相談を、カーテンの外側で聞いてたら…

町田の事を思い出したんだ。

町田がクラス中に苦しめられている…

その中に俺もいて…

町田は物陰で泣いていて…

それを見ていた俺はどんな気分だったか。

…恐ろしい答えが浮かび上がった。

軽い気持ちで弄んでいた。

冷や汗が出てきた。

頭を抱えて…耳を塞いで…
打ちのめされた。

今、俺が抱いてる心境は…町田と同じなんだって…!!!!

なぜ…

あんな事をしてしまった!!??

昔、俺が町田を苦しめた言葉が…俺をまた打ちのめした。

「キモい」

「死ね」

「学校くんな」

「教室で息を吐くな」

「人間じゃねえ」

きつとそれだけじゃないだろう…

何度も何度も…

執拗に追いかけて回し…

言葉の暴力を浴びせて…

何度も何度も…

町田は物陰で泣いて…

俺は…怖い事に、町田がいじめられて…泣いていて…。それが当然と感じていて…。

判断力がおかしくなっていたんだ…

なんて事をしてしまったんだろう……。

後悔しても遅い。

今自分に罰が当たっている。

絶望したような気持ちで何日も過ごしていた。

俺は町田にずっと謝りたかった。

謝って済むもんか！

でも…解って欲しかった。

葛藤は…今でも続いているよ。

いじめって…いじめられてる側もいじめた側も、将来必ず苦痛を残す。

俺は…町田の立場になって良かったのかもしれない。

そつでなければ…今ごろ…今以上に嫌な人間になっていた。

教えられたんだ。

これは今だから言える事だけ…。

それが1個目。

もう1個は…さっきも話した、亡くなった妻の話。

実は、そんな時に保健室で出会ったんだ。

俺が1人保健室で、本を読んでいた時。

ガラッとドアが開いて、一人の女子生徒が入ってきた。

「あの…先生いない？」

「どうやら…具合が悪そうだった。」

俺は相変わらず言葉が出なくて首を横にふって答えた。

「そつかあ…じゃあ勝手に休んじゃおっかな…」

上履きの色で同い年とわかった。

俺、ちょっと気まずくて俯いてた。

彼女は俺が読んでた本…まあ、保健室にあった図書室の本だったんだけど。

「あぁっ！ここにあったんだ！探してたんだ！この本！」

「そうだったんだ。」

「読み終わったら次いい？」

俺は相変わらずまた頷くだけだった。

「あつりがと」

実はもう既に読み終わってて3周目ぐらいだった。

「…もっ…もってって…いいよ。」

精一杯小さな声で答えた。

「んっ？」

彼女は首をかしげている。

「…もう…読んだから…」

頑張つて答えた。

ちよっとムキになってた。

彼女はやっと理解してくれたか、

「いいの〜？やった！ありがとう！！」

この子…俺を見て普通に喋ってる…？

不思議だった。

なんで俺なんか…

まともに話しかけてくれるんだ？

当たり前前事がとても嬉しかった反面：怖かった。

彼女は続けて、

「同年？」

（上履き見ればわかるだろ？）

「あ…う…うん」

「学校めんどくさいよね」

（多分…めんどくさいの理由が違う…）

「…う…うん。」

「どこのクラス？」

（…知ってどうする？）

「…4組」

（俺、保健室登校してるんだぞ！この子解ってるのか？）

「あだし2組」

「…そつ…そつなんだ…」

面接みたいな会話だった。

しかし、彼女は飽きもせず、

「ふう〜まいったよう〜風邪ひいちゃったみたいでさあ〜」

（…まいつてるようには見えないけど…むしろ、俺がちょっとまいつてる。）

「もう帰りたいなあ〜」

（…帰れば？）

「一緒にさぼる？」

「えっ!？」

俺は意外過ぎる言葉に驚いて顔をあげた。

「さっ…さぼる？」

彼女は相変わらずテンションがおかしかった。

「そっ どうかで買い食いしない？」

（買い食いかよ!？）

俺の心臓は久しぶりに動いたような音を発して鳴る。

「なんだこのっ!真面目人間っ!」

と彼女は笑顔で変な事を言い出す。

とつか…俺相手にフレンドリーによく接してくれるよなあ…

変な子…。

しかし、俺の口は勝手に動く。

よくまあ…言えたよな。そんな事。

「…いいよ。…だっ…脱走しよっか。」

友達が欲しかった。

彼女がその後俺の話はどこからか聞いて、キモいとか何でも思えばいい。

今は…友達が欲しい…

独りは嫌だ…！

その後、彼女と俺は学校を抜けだし、近くのちよつと隠れた喫茶店でアイスコーヒーだけで2時間ぐらい喋ってた。

話してた内容は…彼女の名前は『伊藤友香』という事。2年2組の学級委員長という事と、さっきまで引いていた風邪がどっかにぶっ飛んだという事。

それと読んでた本の事と…俺の事。

とはいえ、その時話したのは、俺が岡本敬二という名前で2年4組って所まで。

あとは…半分彼女の話はずっと頷きながら聞いていた。
あんまり覚えてないって事は結構どうでもいいような内容だったと
思う。

でも彼女は飽きもせずはずーっと喋りつ放しだった。

2時間があつたという間にすぎてしまった。
俺も嫌ではなかった。

久しぶりに人と話している。

新鮮な気持ちだった。

それから…

数日後。

彼女…伊藤友香はまた俺のいる保健室に来た。

「おおつす けーくん元気い？」

また仮病か？

そう思ってたけど…嬉しかった。

何回も来てくれるようになった時には俺は休み時間を楽しみにして

いた。

そして…

運命の悪戯だろうか…

3年生になった時。

伊藤友香はクラス名簿を持って来て、

「またここに居るう！けーくん、見て！」

伊藤友香が見せてきたものには…

一枚の紙に…一緒の欄に…俺の名前と伊藤友香の名前がある…
要するに同じクラスになっていたのだ。

「あたしのクラスになった限り…ここには居させないぞっ！」

「えっ!?!…でも…俺…」

「行こうよ！教室！」

「…………無理だよ」

俺はうなだれながら引つ張る彼女の手をふり払った。

彼女はとても悲しそうな顔をした。

少しして彼女は、

「じゃあ…放課後。ここに居て。待ってて。絶対だよ…。」

と言い彼女は保健室を出て行った。

同時に外の廊下がざわつく。

みんな…始業式に行くのだろう。

取り残された俺は先程の彼女の悲しそうな顔を思い出していた。

先生に言われたから教室に連れて行くこととした…

そうとはとても思えない。

悲しそうな顔だった…

というより、寂しそうな顔と言う方が近い。

一緒のクラスになったんだから…教室においでよ。

言い替えるとそんなセリフにも聞こえてきてしまう。

ああ…俺…。

馬鹿だな。やっぱり…

何度か帰ろうとしたが、俺は放課後まで待つ事にした。

同じクラスになれば嫌でも解ってしまっだろう。

俺の事。

彼女に先に言っておけばクラスで一緒に話したりする事をあきらめてくれるだろうか。

そしたら…俺はまたここに居ればいい。

…でも…

もし…万が一。

俺を理解してくれるのなら…!!

賭に出よう。

俺はそう決意した。

俺だって…まだ彼女に仲良くして欲しい。

なくしたくないから…！！

そうして俺は彼女に賭けようと放課後を待っていた。

時間が恐ろしいほど遅く感じた。

かけがえのない友達が出来るか…

…それとも

かけがえのない友達を失うか…

第19話：告白〈後編〉

不安な気持ちを抱きながらも、俺は彼女を待っていた。

チャイムが鳴る。

外側の廊下から話し声と足音が聞こえ始めてくる。

いつもは…こんな時間まで居ないのに。

窓の外にも帰宅する生徒が見えた。

彼女がこんな俺に呆れて帰ってしまうのではないか…？

不安な気持ちになって、彼女が窓の外に現れない事を祈っていた。

祈りが届いたか、彼女は窓の外には現れなかった。

でも遅い…

何やってるんだろっ…

チャイムが鳴って30分ぐらい経った頃。

保健室のドアが開いた。

そこに立っていたのは彼女だった。

「おっす！けーくん！お待たせ！」

彼女はやっぱり来てくれた。

そして、俺の手をグイグイ引っ張りながら、

「さっ！行くぞっ！」

と俺を促す。

「…どこにいくんだ？」

彼女は振り向き、

「3年1組の教室！」

何がしたいんだ！？

本当…解らなかった。

でも…

今打ち明けるべき話がある。

「あの、なんで教室なんか」

「ダメッ！いつまでも逃げてちゃ！」

…！？

「…どっ、…どうして!？」

君がそんな事知ってるんだ!？」

1階の一番端の教室の目の前につく。

嫌な記憶が蘇る。

ドアを開けたら…

あのクラスメイト達が居て…

頭が真っ白になってきた…

「けーくん!」

あっ…

ダメだ。とてもドアなんて開けられない。

保健室にかけこんだときの記憶が蘇る。

2組4組のドアの前で…中からは意地悪なクラスメイト達の笑い声が聞こえてきて…

手に力が入らなかった…

拒否反応みたいなのが出ていた…

騒ぐクラスメイト達の声…

開けたら何が起こるかなんて…

解ってるんだ…

知ってるんだ…

その後…どうやって保健室まで辿り着いたかわからない。

仮病を使っつてずっと隠れていたのは覚えてる。

先生は察してくれてたのか何も言わなかった。

何人か…俺みたいな生徒はいたからな…

「しゅめん…無理だよ…」

見守る彼女に俺は力なく呟いた。

「知ってたみたいだね…そうだよ…俺はずっと…逃げてる。クラスメイト達が怖くて逃げてるんだ。」

彼女にしては珍しく真面目な顔をしていた。
でも、俺が予想していた軽蔑の表情はひとつも無かった。

「違う!!」

彼女の声は少し怒っていた。

「けーくんは、自分から逃げてる!!」

衝撃だった。

俺が自分自信から逃げてる…?

「あたしは知ってたよ!けーくんと学校さぼる前から…4組の同じ部活の子から聞いたから!…でもね、あたし、人に流されるの嫌い。偏見も嫌い。あたしはあたし。」

「けーくんはまず保健室から脱出!克服しなきゃダメツ!!原因考えて自分と向き合わなきゃダメだよ!!でないと、いつまでも同じ事繰り返すよ!!」

つまり…彼女は…後ろ向きな俺に真正面向かせる為に、ここに連れてきたって事…!?

彼女は笑顔で

「あたしは…けーくと仲良くなりたかったからそーしたのっ!」

俺は今まで、知ってて彼女が俺に接してたなんてひとつも思わなかった。

なんか…

彼女を疑っていた事が恥ずかしく思えて来た…

「ごめんね…」

無意識に頬に涙が伝った。

自分でもびっくりんだけど…彼女はもっとびっくりしていた。

いきなり目の前の男が泣き出したんだ。

「あつ…ちよつ…けーくん!?!」

そして笑顔で

「泣き虫〜!」

と言いながら背中を擦ってくれた。

俺がひと通り落ち着いてくると、彼女は俺の手を引いて、

「席、教えてあげる。行こっ！」

そして3年1組のドアを開けたんだ。

久しぶりだった。

教室に入るのが。

中には誰もいなかった。

そりゃそうだ。

もう放課後だし、部活も始まっている。

帰る生徒はとっくに帰っている。

そして窓側の一番前の席に来て、

「ここが、けーくんの席！ごめんね、あたし、クジ運からっきしだから。」

ほぼ特等席だな…。

すぐ指されるな…。

ちゃんと喋れるかな？

「何かあったら助けてあげるから…」

彼女は不安そうにしてる俺に、

「だから…一緒に頑張る！」

と言ってくれた。

そうして…卒業まで俺は教室に戻って学校に行く事が出来た。

高校もまた彼女と一緒にの所を受けて一緒に通う事になった。

そして高3卒業間近に母さんが倒れたんだ…

母さんは女手一つで俺を育ててくれた。

過労と…元々そんなに強くないのに毎晩大量に酒飲んで寝てたから、
肝臓をやられてたらしい。

俺は、卒業してから工事現場とビル清掃のバイトして、生活してたんだ。

母さんが倒れた直後かな。

彼女と付き合ったのは…

えっ！？どつちからって…

アハハ…。言わなきゃダメ？

うん…彼女からだよ。

彼女から俺を支えてあげたいって俺に告白してくれた。

昔から一緒に居たし…お互い感付いてたからね。

…で、そっちは？

あ、高橋主任からだったよね。…ごめん。聞いてたから。

ハハッ…。ま、そう怒らないであげてよ…

話戻すね。

俺なんかと正反対で、友達も多くて、ハキハキしてて、ちゃんと自分を持つてる彼女が、俺なんかといたら不幸になるって言ったのに…
彼女は、そんな事ない！の1点張りだった。

楽しかったよ…

そりゃもう。

彼女と居れば辛い事も忘れられたから…。

母さんの看病にも来てくれてたし…向ここの家族もお見舞い来てくれてたから母さんも喜んでくれてたよ。

母さんは結局その年の夏に容態が急変して亡くなったんだ。
葬儀の件も彼女の家族に随分助けられた。

あの馬鹿親父は結局来なかった。

絶対、ああなるもんか！って強く思った。

そうして…事情を知ったビル清掃会社の社長さんが俺をバイトから正社員で採ってくれて、隣の町のアパートに引っ越して、彼女はちよくちよくご飯作ったりしにきてくれた。

そして19歳の時。

彼女の妊娠が発覚した。

そう。友喜だよ。

彼女は生みたいってずっと言った。

俺だって生んで欲しい。けど、向こうの家族がそれを許すか…？

怒られる覚悟と、謝りたい気持ちで頭がグチャグチャになってた。

向こうの両親にしたら、大事な娘をこんな、しょうもない男にやりたくないだろう。

しかし、反対されるどころか、援助するから籍いれろって…！

「変わってる娘ですが、これからもよろしくね」とまで言ってくれたよ…

俺は彼女…友香と籍を入れて…俺が二十歳の時。友喜が生まれた。

決して裕福ではなかったけど…幸せだった。

でも…

幸せは長続きはしなかったんだ…。

友喜が2歳になった時。

友香が少し…なんていうか……。

おかしくなってたんだ。

最初は体調が悪いのかと思ってた。

食欲がなさそうだったし…顔色が悪かった。

友喜がまだお腹に居る時も不安定な時期があったけど…それは妊娠の為…要するに、つわりがキツかったからだったし…

最初は2人目かと思ったんだ。

友香は何回か病院に行ってたし。

そうやって呑気に構えてたんだ。

数か月後。

突然だった…

彼女は交通事故で亡くなった。

道路を横断しようとして…それで車に跳ねられた。

全身を強く打って…。

その時、俺は家に居たんだ。

友喜のお守りをしてた。

頭がおかしくなりそうだった…

事故の知らせの電話から…残り全ての人生に絶望したよ。

事故原因は運転手の居眠り運転だった。

友香の両親は…もう…なんて言えばいいかわからない位…悲しんでいた。

なのに…

俺を一生懸命励ましてくれてた。

言葉が出なかった…

クタクタになって家に帰ってきた時…

俺は………

見つけてしまったんだ……

彼女を死なせたのは…俺だった…って事を…

思い知らされてしまったんだ…

薄暗い部屋の…テーブルに…置かれていた本の間…

俺宛の手紙があった。

『けーくんへ。』

いつか言おうとしてただけど、私の性格上…なかなか言えなくて、けーくんの扶養に入ってる限り、いつかはバレるので、口で言いつらいから手紙で話します。

私。前々から…近所の人達に無視されてて…こんな経験初めてなの。道で擦れ違った時に悪口を聞こえるように言われたりもしてたの。私が…悪いのなら謝ろうとしても…話も聞いて貰えなくて。郵便物を勝手に開けられたり、昼間、下の階から床をつつかれたりして、多分足音がうるさかったのかなって思ってた謝りに行っても…相手にもして貰えなくて…。

誰が…どうしてそんな事をするのかもわからないの。

どうしようもないのに…いつも私達の為に頑張ってる働いてるけーくに負担をかけたくなって…。

私、精神科に通ってたの。

どうやらね病気がらしいの。心の風邪。

時々ね。ぼんやりしちゃうの。最近私、物忘れひどいでしょ？大事な事も有り得ないぐらいに簡単に忘れちゃうの。とんでもなく無気力になっちゃうの。それが…病気から来てるみたい。迷惑かけてごめんね。

私…今更けーくんの…あの時の気持ちを理解出来たと思う。

お節介ばかり言っちゃってたね…ごめんね。

けーくんが昔いじめをして…後悔してたって前に言ってたよね？今、私はその時のけーくんの気持ちになってる。私…ダメだな…それでも怒りもせずに、けーくんは私と一緒に居てくれた。

本当…ありがとう。

この手紙を読んでくれたら…私、変な子だから自分じゃ言い出せないから…けーくんから話を切り出してくれないかな？お願いしていい？

あと、読んだら捨ててね。なんだか…恥ずかしいからさ。

友香より。』

俺は激しい後悔に教われた。

頭の中にいろいろな考えがグルグル回る。

俺が…彼女の病気に気付いていれば…こんな事にはならなかった…
事故は…もしかすると…病気でぼんやりしてた友香が車道に出たか
らかもしれない…

俺と同じような…

周りから何の根拠もなしに白い目で見られて…味方がいなくて…

昔、自分も同じ経験してたじゃないかっ！！！！

ふと隣りに置かれていた写真立てが目に入った。

幸せな家族3人で撮った写真。

写真立てを手に取る。

友香が笑ってる…

でも…

友香はもう笑わない…

俺の…せい…！！

持っていた写真立てを思わず落としてしまった。

ピシッ…

写真立てのガラスにヒビが入る。

お前のせいで幸せな家族は壊れてしまった

そう言われたような気がした。

「うあっ…うわあぁーっ！…！！！」

俺は絶叫した。

絶望した…

俺自身に…

第20話：風邪は治りかけている

その後。

精神状態が不安定になり友香と同じ病院に通った。

先生は俺も心の風邪と言った。

先生は俺の話はずっと頷きながら聞いてくれた。

先生は俺にしばらく会社を休んで、友喜と居るように言った。

父親がこんなんじゃない…残されたこの子は独りぼっちになってしまう。

あの馬鹿親父みたいになつてたまるか！！

そう思つて…病院に通いながら…いろいろありながらも友喜をこころまで育ててきたんだ。

俺が友香を死なせたも同然…

その天罰というべきの…俺の“風邪”の症状は、『時々ひどく無気力になる。』

『少しでも緊張すると人と話せなくなる。』

『時々理由もないのに不安な気持ちになる。』

『なにかと自分を追い詰めてしまう』

『記憶力が激しく低下する』

…あと…1回だけ…してしまったんだけど…

『自分の身体を傷つけたくなる衝動に駆られる。』

左腕の内側。

手首より少し下。

これが…そう。

いつだったっけ…

台所にあったハサミで思いきり傷つけてしまった

なんでそんな衝動に駆られたか解らない。

というより、覚えてない。

確か…友喜の声で正気に戻ったんだ。

左腕の内側から血がポタポタ垂れてて…

生暖かくて…

酷く寒気がした。

俺は病気だ。

このままじゃ…いつか自らの命を断ってしまっ…

友香…

ごめん…

決意を捨てる所だった。

俺は…

友喜が生まれた日。

友香と約束したんだ。

友喜を…

「世界で一番幸せにする…!!」って…」

「なのに…今はどうなんだろう…母親のいない不幸を叩き付けてたし…無理やり良い子になろうと苦労までさせてる。…小さな4歳の息子に…」

岡本はうなだれていた。

綾子も力無くうなだれている岡本を、ただ…何も言えずに見つめていた。

「俺は…友香に連れられてった、あの教室に立っても…何も変わりやしなかった。結局同じ事を繰り返してたばかりか…俺の大切な人達まで…」

「それは違うよ!…!」

綾子は叫んでいた。

というより、怒鳴っていたと言う方が近いかもしれない。

なんとなくだけど…

岡本は自分と考え方が似ていると思った。

でも…

まるで…鏡をみてるようだった。

似ている。

だから、
解る、
見えてくる。

(自分に言ってるようだ…)

「違うよ…岡本君が悪い訳じゃない!」

(それに…)

「証拠も…根拠もない。」

(つまり…)

「岡本君は自分自身を追い詰めてるだけなんだよ…もう、誰も怒ってないのに…。向ける所のない嫌な事、記憶を自分自身に当てる事で自分を責め続けて、ずっと…ずっと…苦しんでる…」

(それは…私も一緒だった…)

「永久に繰り返す…私もそうだったから…よくわかる…」

岡本はうなだれていた顔を少し上げる。

「……やっぱり……」

「え?」

岡本は少し安心したような顔をしていた。

少し…開放された感じ…？

…あ。

笑ってる…？

「良かった…聞いてくれたのが町田で…」

「どうして…」

って、私もなんとなく理由が解るけど。

「やっぱり…町田は先に答えを出してた。地獄から抜け出す方法！」

「地獄…過去の事？」

「そう。…俺、町田と再会した時…ずっと謝ろうと思ってた。…けど…堂々としてる町田を見て、もしかして…かなり強くなったんじゃないか？って思ってた。…教えて欲しくなったのかな？何度も何度も町田と話せる機会を探してたけど…なかなか機会も勇気も無くて…許して貰える自信無かったから…今日…やっと言えて良かった…それと無理に聞かせちゃってごめん…ありがとう！」

綾子は首を横に振る。

「ううん。大した事してないよ。…なんかさ…すごくいい奥さんだね。友香さん。」

岡本はちよつと照れたように頭をかきながら、

「俺と友香を認めてくれるんだ。」

「もちろん!」

「…あまり…世間には良く見て貰えなかったから…ありがとう…。」

「あのね、」

「ん?」

「英…、いや、高橋主任に最近よく言われるんだけど…岡本君と私、似てるんだって。」

「そついや…!」

以前車の中で主任に当てられた自分の性格で、全てを話しそつになつた事を思い出す。

「あ!それ、俺も言われた。今だから解るけど…似てるかもしれないね。同じ苦しみを背負ってきてるんだから…」

綾子は頷く。

「そつだね…」

空は晴れていた…

数日後。

敬二は友喜を連れて友香のお墓のある霊園へ来ていた。

「パパ？ぼくのママはここにいるの？」

敬二は友喜の肩に手を置いて

「ここで寝てる。」

そして友喜の胸に指を指す

「ともくんが悲しまないように…寂しがらないように守ってくれてる。」

人差し指を自分に向ける

「ママは友喜を置いて行かない。パパの中に大切なモノを預けてるから。」

「大切なモノ？」

「うん。だからママはずっと側に居る。見守っててくれる。パパ解るんだ…」

友喜は目をまん丸くする。

「じゃあ…ぼくにはママが居るんだね！」

「うん。内緒にしててゴメンネ。」

友喜は嬉しそうに頷く。

初めて打ち明けた。

友喜にはママがいたって。

ママは昔遠い所に行かなきゃいけなくなっちゃった。
パパに大切なモノを預けて
遠くから見守っている

随分遠回しに説明したが…理解してくれただろうか…？

「ねえねえ、えいゆうさんとおねーちゃん元気？」

帰り道、いつものチエックが入る。

「明日会えるよ。えいゆうさんとおねーちゃんの結婚式だね。」

「わあっ！！」

何故か嬉しそうに友喜がはしゃぐ。

ああ。そっくり。

一緒にさぼった時初めて見た君の曇り一つ無い笑顔に…

そしてあることに気付く。

高橋主任は…友香と似たような性格だったから…町田は俺と共通点
多いから…きっと俺は安心して2人を信じた…

…あれ？

という事は…

克服した？

夢を見た。

誰だろう。

岡本君？

周りには悪魔の仮面をつけた子供達。

岡本は悪魔の仮面をつけてない。

…逃げよう！

…逃げる？

悪魔の仮面姿の子供達が迫って来る。

綾子と岡本の服を引っ張りながら詰め寄る悪魔達。

岡本の顔を見ると…

大丈夫。

…と、ほほ笑んでくれた。

綾子も、もう震えていない。

…逃げる…じゃないね。先に行こう！

岡本と綾子の手をそれぞれ引く者が居た。

あ…！光が…眩しい！

出れたんだ…ここから…やっと…

岡本君も出れたんだ…！良かった…

そして手を引いた者を見る。

誰？この人…

『人は所詮…人。』

『理由無く人を攻撃するのは』

『本能。』

『人は…進化を怠っている。』

『衰退…』

『本能に支配され…』

『やがて…』

なにそれ…？

『成長する力』

『乗り越えられる人が絶えなければいいがな…』

えっ！？

あなた…誰？

「綾子…はらへった〜！」

英雄の気の抜ける一言で目が覚める。

英雄はグッスリ寝ている。

お腹が減ってる夢でも見てるのだろうか。

朝日は柔らかく部屋を照らしていた。

出口に着いた…んだ。

あの部屋の扉は…

もう、消えた。

もう2度とドアをくぐる事はないだろう。

「ん〜…おっ…？おはよう…ふぁあっ〜」

英雄は大あくびをしながら綾子にほほ笑んでいた。

「おはよう。」

綾子は、ほほ笑んで、

「ありがとう。」

と、ささやいた。

「…？…何があ？」

英雄は目に涙を溜めながら首を傾げる。

「これからも…よろしくね。」

「おう！」

英雄は、ほほ笑んでいる綾子にそっとキスをした。

幸せな未来。

これからもまだまだ…。

第21話：手紙

あれから…10年目の春。

窓から桜の花が見える絶好の花見スポットでもあり、職場の中で唯一、俺だけの城でもある、日の当たる小部屋で今朝届いたハガキを読む。

《岡本君へ》

お元気ですか？

“先生”頑張ってる？

ウチは上の子も下の子も暴れん坊でついて行くのが大変だけど、毎日楽しいよ。

また友喜君と、こっちに遊びに来てね。

高橋英雄・綾子

ハガキの写真には七五三でおめかしした2人の男の子が笑顔いっぱい写っていた。

町田もすっかり『お母さん』だな…

敬二はほほ笑みながら溜め息をついた。

コンコン…

敬二はそつと鞆にハガキをしまう。

「どうぞー。」

ガチャ…

数人の男子生徒が

「せんせー！お茶しよー！」

「おいおい。ここは悩んでる子がくる所だぞ。おやつは出ないぞ。」

男の子達はエへへと笑いながら席に座る。

「俺、お母さんと仲直りできたよ！」

「こないだの事！やり返してやったよ！」

「最近学校楽しいよ！」

口々に報告してくれる。

彼らは以前、スクールカウンセラーの“敬二せんせー”が悩みを聞いた子供達だった。

その時、彼らは相談室で仲良くなったのだろうか。ちよくちよく敬二の隠してるおやつ目当てに遊びに来てくれる。

わいわい勝手に敬二の隠してたチョコをつまんで楽しそうにしゃべっている。

「おまえら…：チョコ内緒にしてくれよ…：教頭先生に怒られるからさ〜」

とか言いながら敬二は嬉しそうに笑っていた。

コンコン…

ああ。悩みのあるお客だ。

「びびぞー。」

女の子が泣きながら入って来る。

「どうした？何か困った事でもあったかい？」
敬二は優しく尋ねる。

男の子達はチヨコを差し出す。

「まあまあ、チヨコでも食って元気だそうぜ！」

「なんかあったの？」

「とりあえず泣くのをやめようぜ！」

ああ…こいつら頼もしいな…

女の子も男の子達に励まされ少しずつ笑顔を取り戻して行く…

あ…良かった。

泣きやんでくれた。

「せんせー…あのね…」

女の子は少しずつ俺に打ち明けてくれた。

話してスッキリしたのか、男子達と一緒にわいわいやってる。

その様子を微笑ましく思い、見守る。

これが…今の俺の毎日だ。

今の俺はスクールカウンセラーとして、東京郊外の私立小学校に赴任している。まあ…いろいろあつて大変だったけど…

…お陰様で毎日が充実している。

この小さな友達もたくさん出来たし。

帰り道。

週に1回になったけど、相変わらず変わってない習慣がある。

立場は逆転されちゃったけど。

「父さーん！お疲れ！」

校門で手を振る背の高い中学生。

そう。友喜だ。

最初大きめの制服を買ったのに、最近では縮んだように小さい制服に見える。

相当身長が伸びたんだな…。

それにまた声も低くなってる？

早いな…成長するの。

「待った？」

「いや？俺も今来たばかりだから。」

友喜はやっぱり母親似だ。

でも、全体を見ると、足して2で割った感じか？

「そうそう。高橋さんところからハガキ来てたぞ。」

「えっ！？見して見して！！…わあ〜っ…あいつらこんなにでっかくなっただ〜！！えいゆうさん、すっかり親父の貫禄だね〜！」

そう。“えいゆうさん”も相変わらず。

それで覚えちゃってたらしい。

「いつか…また、えいゆうさんの家、遊びに行きたいな〜！」

「そうだな…友喜が高校決まったら報告がてらに行こうか！」

友喜は嬉しそうに笑ってうなずく。

「そうになったら…いい加減、真面目に勉強しよっかな…」

「…そのセリフ。今までたくさん聞いてるんだけど？」

親子は互いに笑う。

幸せな2人家族。

俺は結局再婚しない決意をした。

友喜はこの事にかなり賛成してるみたいで… 心の中に母さんがいるから、父さんが再婚って… なんか嫌だな… って言ってた位だ。

俺も考えられないし、最愛の人は一人で充分だ。

… 充分幸せだ。

たまに友喜は友達の家泊まりに行ったりしてて、ちょっと寂しかったりもするけど、必ずちゃんと帰って来るのが解るから、安心していられる。

俺、ちゃんと幸せ掴めたよ…

お互い、決して独りぼっちじゃない。

絆がある。

目に見えてないけど、ちゃんと解る。

離れてしまうのか？と、心配してたけど、全然そんな事なかった。

もう… 後ろを見ない。

本当、高橋さんの言った通りだ。

その日の夜。

あまり手紙なんて書いた事がないからハガキに悪戦苦闘したが、ちやんと返事を書いた。

《町田へ》

ハガキありがとう。

子供達、大きくなったね！

写真を友喜に見せたらやつと真面目に受験勉強をする決意をしてくれたよ。

友喜の進路が決まったら報告がてらにまたお邪魔します。

2人共、子育て頑張つて！

岡本敬二

本当は付け足したかったけど、やめた文字がある。

岡本敬二の続きに

『友香・友喜』

と…。

本当に3人家族だ。

心の中で…永遠に…

町田はこの続きの文字に気付いてくれるだろうか…

切手を張り、空を見上げる。

昔…不思議な夢を見た。

真っ暗で…出口のない部屋の中に俺が居る。

それは…教室だった。

そこに誰かが色を纏って現れる。

誰だろう。

町田？

周りには悪魔の仮面をつけた子供達。

町田は悪魔の仮面をつけてない。

…逃げよう！

俺が言った。

…逃げる？

町田は不思議そうにする。

どうして？と言わんばかりに。

悪魔の仮面姿の子供達が迫って来る。

俺と町田の服を引っ張りながら詰め寄る悪魔達。

あれ？

あんまり怖くないぞ？

なんでだろう？

飛び越えられる自信があるからかな？

町田の顔を見ると…

大丈夫。

と言いたげにうなずいていた。

俺も大きく頷いて、

大丈夫

と、ほほ笑んだ。

俺も、もう震えていない。

…逃げる…じゃないね。先に行こう！

俺と町田の手をそれぞれ引く者が居た。

あ…！光が…眩しい！

出れたんだ…ここから…やっと…

町田も出れたんだ…！良かった…

そして手を引いた者を見る。

誰？この人…

『人は所詮…人。』

『理由無く人を攻撃するのは』

『本能。』

『人は…進化を怠っている。』

『衰退…』

『本能に支配され…』

『やがて…』

なんだそれ…？

『成長する力』

『乗り越えられる人が絶えなければいいがな…』

えっ！？

あんた…誰？

不思議な夢だった…。

その後…場面が変わって…友香が出て来たんだ…

「ありがとう！！ありがとう！！」

俺はがむしゃらに叫んでいた。

友香に言いそびれたお礼。

ずっと言いたかったのは…
懺悔でなく…

お礼。

友香は優しくほほ笑んでくれた…

そして俺に、

「ありがとう」

と囁いてくれた所で目が覚めた…。

最近の写真に『報告』をしている。

友喜の成長ぶり。
学校での事。

そして…

幸せだって事…。

もう怖くない。

あの部屋には…2度と戻る事はないのだから…。

これからもまだまだ歩いて行くんだ。

ずっと…。

友香の写真の横に、高橋さんと町田の挙式の写真がある。

俺含めて、みんな…幸せそうに笑っていた。

第21話：手紙（後書き）

最後まで、この読みにくい文を読んでいただいて本当にありがとうございます。ございます！この話は作者の過去に実際に体験した話を大半使いました。実際に英雄、敬二、友香のモデルになった方はいます。人間関係も…そう大して変わらないので…心当たりのある方は気付かないで下さい！というか、やっぱり話したい（笑）まず、英雄のモデルは私の旦那です。性格も口調も運転の恐ろしさもそのまんまです。英雄の名前はその時に偶然頭の中にある有名な野球選手のテーマソングがループしていて、思わず採用しました。それでいいのか！？敬二のモデルは実際に職場で再会した昔のいじめっ子をモデルにしました。ちなみに、いじめられてた時、キレた私は彼に毒手紙で仕返しをします。給食の牛乳もぶっかけました（笑）ただ、か弱い訳ではなかったみたいです。彼が思い出しませんように…！最後に友香のモデルの方は姉です。本気で自己中でマイペースで、たまにその自己中ぶりにムカつきを通り越して可愛らしさすら感じてしまったぐらい大好きな姉貴です。いじめにあってる時、随分助けられました。まだまだ人物について語れますが、文字数と読者様の疲労を考え、この辺で。これからもまだまだ書きます！よろしくお願ひ致します！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1980b/>

教室という名の地獄

2010年10月19日14時36分発行